

文學士伊藤允美撰

中等東洋歷史

東京 株式會社普及舍



凡例十言

- 一、本書は、改正中學校令に遵ひ、その細目を參酌し、専ら中學教科用として編述し、なほ、傍ら、東洋史研修者の指針たらしめむことを期したり。
- 一、現今中學程度之良好なる東洋史、世に尠なしとせず、しかもなほ、みづから搦らず、敢てこの書を公にしたるは、多少の抱負なきにあらず、諸氏讀過の際、幸に、その取捨用意の點に首肯する所あらば、編者の卑懷乃ちまた足れり。
- 一、卷首にて述ぶるが如く、本書は支那を中心として、東洋諸國を附説して、東洋古今の趨勢を捉へむことを努めたり、その配合組織の如きは、頗る編者の意を苦めたるものなれども、可否如何は、ただ讀者の品隅に委せむのみ。
- 一、支那本部の事蹟を描き、なほ多く力を諸邦國の興亡に用ひ、苟も東洋の大勢に係ある事實を網羅したれば、殆どみづから遺憾なしと信ず。
- 一、わが日本に關係ある事項は、悉くその一般の形勢と時代とを擧げて、すでに日本歴史の一斑を學びたるもの、記憶聯想を喚起せむことを期したり。
- 一、西洋に關係ある趨勢も、また、力めてこれを漏さず、次學年にて、西洋歴史を學ぶべきもののために、東洋史の梗概を知らしめたる上、更に東西南洋の連鎖を解せしめ

むことを企圖したり。

一、本書は、一週二時間の教程にて、一學年間に修了せむことを期したれども、錯綜繁多なる東洋大勢を包容せむことに注意せし結果、或は多少過剰の點なきを保せず。教師諸氏、もし適當に取舍し給はば幸甚なり。

一、本書學習の際は、まづ龍頭を一讀して、然る後その本文に向ふべし。また卷末に、地圖年表を附加したれば、必ずかれこれ参照して、深く時代と事實とを咀嚼せむことを望む。

一、編者、本書の編述を企つるに當り、まづ三四の學識あり經驗ある師友の意見を叩きて、組織の大綱を定めたりといへども、もしなほ多少の缺陷あらば、識者諸氏願くは、魯魚の誤謬を指摘すると同時に、高見を垂るるの勞を惜まらるなかれ。他日、必ず大いに訂正を加へて、その厚意に酬ひむ。

一、東京美術學校教授寺崎廣業君、典故考證に據りて、二十有餘の挿畫を點じ、大いに本書の目的を助けて、光彩を添へられたることを感謝す。

明治三十五年一月十一日夜

東京帝國大學圖書館にて

編者識す

中等東洋歴史

目次

第一編 上古史

- 第一課 上代の支那および唐虞……………一
- 第二課 夏殷の興亡……………三
- 第三課 周の盛衰……………四
- 第四課 春秋の覇者……………六
- 第五課 戰國の形勢……………九
- 第六課 周の制度學術……………一二
- 第七課 太古の印度 佛教の興起……………一六

第二編 中古史

- 第一課 秦の一統 秦の盛衰……………二一
- 第二課 漢の統一 漢の初世……………二四
- 第三課 漢の武帝時代……………二七

第一節 武帝と西南諸蠻 第二節 武帝と朝鮮
 第三節 武帝と匈奴および西域
 第四課 宣帝の中興と漢の末路……………三三
 第五課 後漢の初世……………三五
 第一節 光武帝 第二節 後漢と匈奴西域
 第三節 東方諸國
 第六課 大月氏および印度 佛教の東漸……………四〇
 第七課 後漢の衰亡……………四三
 第八課 三國の鼎立 晉の初世……………四六
 第九課 晉および五胡十六國(その一)……………四八
 第十課 東晉および五胡十六國(その二)……………五二
 第十一課 南北朝の世 上……………五五
 第十二課 南北朝の世 下……………五七
 第十三課 隋の世 唐の興起……………六〇
 第十四課 唐初の内政 制度……………六二

第十五課 唐の中世……………六五
 第十六課 唐の末世……………六九
 第十七課 唐の外征および交通……………七一
 第一節 外交一般 第二節 東方諸國
 第三節 唐と西北諸國
 第四節 唐と日本南海および南洋との交通貿易
 第十八課 印度ペルシャおよび大食の盛衰……………八二
 第十九課 漢唐の學藝宗教……………八五
 附 節 儒佛の東流……………九一

第三編 近古史
 第一課 五代の世 契丹……………九二
 第二課 宋の初世 宋遼西夏の關係……………九四
 第三課 神宗の新政 兩黨の軋轢……………九八
 第四課 宋金遼の興廢……………一〇〇
 第五課 宋金の交戦……………一〇二

第六課 宋代の儒學 文藝および宗教……………一〇六

第七課 宋代の高麗と中央亞細亞……………一〇九

第八課 蒙古の興起 (太祖の西征)……………一一二

第九課 蒙古の興隆 (太宗の南伐、拔都の西略)……………一一五

第十課 蒙古の興隆 (憲宗の南伐、ブライーンの西征)……………一二七

第十一課 元初の内治外交……………一二〇

第一節 世祖の内治 第二節 世祖の東征 (高麗と日本)

第三節 元の南方經略(ビルマ、コチナ)

第十二課 元の領土 東西洋の交通……………一二四

第十三課 ハイフの反 元の衰亡……………一二六

第十四課 明の初世……………一二九

第十五課 帖木兒の兼併……………一三一

第十六課 明の中世……………一三五

第十七課 南東諸國および倭寇……………一三七

第一節 交趾、緬甸、暹羅の盛衰 第二節 高麗、朝鮮の興亡

第三節 日本、明朝、朝鮮の交戦

第十八課 清の興起 明の滅亡……………一四〇

第十九課 元明の學藝、宗教および美術……………一四二

第四編 近世史

第一課 清の建國 世祖の一統……………一四六

第二課 聖祖の功業……………一四八

第三節 三藩の亂 臺灣の平定 第二節 清露の交渉

第三節 清朝と西北諸族

第三課 高宗の偉業……………一五四

第一節 西方經略 第二節 南方經略

第四課 清代の極盛時 制度、文物および宗教……………一五八

第五課 東洋における西歐諸國民……………一六二

第一節 西歐人東漸およびその競争

第二節 モガル帝國、英領印度

第六課	清朝の憂患 清英露の交渉……………	一六七
第七課	露國の南略 露清英の交渉……………	一七二
第八課	南亞の形勢……………	一七五
第九課	日清韓の關係 二十七八年の戰役……………	一七八
第十課	二十七八年戰役ならびに北清事變と西歐列國……………	一八四
第十一課	東洋における歐米列國と日本の位置……………	一八九
附錄		
對照年表		

中等東洋歴史目次終

中等東洋歴史



第一篇 上古史

第一課 上代の支那および唐虞

文學士 伊藤 允美 撰

東洋史

支那と漢人種

東洋史とは、西洋史に對して、名づけたる世界歴史の一半にて、支那を中心として出發せる文明の進路を追ひて、亞細亞特に東亞諸國民の盛衰興亡を記述したるものなり。

支那の文明を開きたるものは、漢人種にて、初め支那西北の方面より、次第に黃河の流域に移りて、土著の苗族を南方に驅逐し、およそ五千年前に幾多の部落を建てて、各酋長を

黄帝と支那帝國

唐虞の治と禪讓

戴き、醫藥、紡績の業をも開きたりといふ。
紀元前二千四百餘年頃、酋長に黄帝(軒轅)あり、内は漢人種を統一し、外は四方を征服し、始めて大帝國を建て、涿鹿(直隸省宣化府)に都し、制度、文物の端を啓きぬ。その領域たる、東南は、海濱より楊子江畔に達し、西北は今の甘肅の西部より、直隸山西の北部に連りしといふ。

黄帝の後、およそ二百年を経て、帝堯(陶唐氏)あり、平陽(山西平陽府)に都す。羲和に命じ、始めて曆法を定めたり。また、舜の至孝を聞き、舉げて政を委ね、遂に位を禪りぬ。帝舜(有虞氏)天子となり、都を蒲坂(山西蒲州)に定む。この時、九年の間、大洪水ありしかば、禹を舉げて、洪水を治めしめしに、よくその功を奏し、九州の水土を平げ、堯以來の大患を除きぬ。舜崩じて、禹天子となりたり。

制度、文物

舜は、堯の制度を整頓し、中央政府に、九官(司空、司徒、司馬、司寇、士、士、士、士、士)を置き、地方には四岳、十二牧を設けて、政治を掌らしめぬ。ここに至りて一統政治の根底漸く固し。また、五刑(墨、劓、剕、宮、大辟)の法を設けぬ。この他に、曆法も定まり、象形文字もすでに發明せられたるが如し。後世より堯舜の世を稱して唐虞の治といふ。

第二課 夏殷の興亡

夏の世と禹

夏后禹は、舜に仕へて治水の大功ありしかば、遂に群后に推されて禪を受け、國號を夏と改め、安邑(山西解州)に都せり。(西前二一〇年頃)禹、儉素を以て天下に臨み、能く太平を致ししかば、群后深く心服し、始めて君主世襲の制を開くを得たり。その子孫あひつぎて父祖の業を守りしが、十三世履癸は、いはゆる

世襲君主

殷の世と革命

桀王にて、末喜を寵し、忠臣を斥けて、暴虐無道なりしかば、遂に商后湯に滅されたり。(西紀前一七〇〇年頃)

湯王は、もと夏の群后なりしが、賢臣、伊尹を用ひて、漸次民望を博し、遂に桀を伐ちて夏に代り、支那革命の先例を作れり。都を亳(河南省歸德府)に奠めて、國を商と號せり。湯王の後十數世を経て、盤庚に至り、水害を避けて、都を西方、殷(河南省南府)に遷ししかば、爾來國號を殷と稱せり。その後十一傳して受辛に至る。紂王即ちこれなり。微子、箕子、比干等諸賢臣の諫を用ひず、暴悪日に甚だしかりしかば、周后に滅ぼされたり。(前一一〇〇年頃)

第三課 周の盛衰

周の起原

周の祖を后稷棄といふ。あひ傳へて古公亶父(古公亶父)に至り、始め

文王と武王

て國を周と稱す。その孫昌は即ち文王にて、大公望(昌)を擧げ、仁政を布けり。その子發立つに及び、太公望、周公旦(武王の弟)あひ共にこれを輔け、益諸侯の歸服を得て、遂に殷を滅して、都を鎬(陝西省西安府)に定めたり。これを周の武王といふ。

周公

武王封建の制に據り、大に宗室功臣を封じたりしが、程なく崩じ、成王幼かりしかば、周公、弟召公奭と政を攝し、天下を兩分して、召公はその西半を治め、周公はその東半を治めたり。周公は世に稀なる人物にて、よく封建の制を大成し、官制を定め、禮樂を尙びて、周代の制度を定め、支那歴代制度の本源を作せり。

宣王

成王、康王の代は、天下頗る太平なりしが、爾來王室漸く衰へ、内は諸侯專横となり、外は四夷の患に堪へざるに至りぬ。成王の後、四百年を経て宣王立ち、内外に處してやや衰運

周の東遷

を挽回せしかど、その子幽王、國政を顧みざりしかば、諸侯離れ畔き、遂に犬戎に攻め殺され、鎬京もまた陥りぬ。諸侯よりて、平王を立て都を洛に遷せり。これを周室の東遷といふ。（前七二）この後、王權益衰へ、終に無政府の状態を現はすに至れり。これ次に述ぶる春秋の世なり。

第四課 春秋の覇者

周室東遷後、およそ三百年間（平王の四十九年より敬王の三十九年に至る）を稱して、春秋の世といふ。周初千八百の諸侯も、いよいよ兼併せられて、今は百六十となりぬ。かれらは王室の衰へたるに乗じて、互にあひ争ひ、夷狄は深く内地に侵入して、生民塗炭に苦しみしかば、王命をかりて、諸侯の盟主となり、内は相互の争を抑

春秋と覇者

へ、外は夷狄の侵入を防がむとする有力なる諸侯を見るに至れり。これを覇者といふ。その始めて覇を稱したるものは齊の桓公なり。

齊桓公と管仲

齊の桓公、尊王攘夷の志を抱きて山東に起り、まづ管仲を擧げて、重くこれに任じ、税法を定め、兵制を改め、頗る富強を致し、遂に王命によりて覇を稱し、（前六七）屢諸侯と會盟し、南方楚に貢を納れしめ、北の方夷狄を攘ひて、中國を安んじたり。然るに桓公、管仲あひ踵いで死せしかば、覇業も忽ち衰へたり。

宋襄公

齊の桓公歿して、その國亂れ、宋の襄公これを救ひて覇を計りしも、楚と戦ひて敗死せり。

晋文公

晋の文公は、今の山西の地に據り、北狄を斥け王室を安んじ、更に楚を破りて、その北侵を抑へ、遂に王命によりて覇業

を成せり(前六三)これより百餘年間、晋は久しく覇權を握りて、秦楚とあひ争へり。

秦の穆公は、西方形勝の地を占め、國政を修めて、大いに地を拓き、遂に西諸侯の伯となれり。(前六三)

楚の莊公

楚の莊公は、今の湖北により、晋の覇業衰ふるに乗じて、これを破り、代りて覇を列國に唱へたり。(前五九)その後、吳に破られ、覇業また衰へぬ。

以上の五皇を稱して五覇といふ。

吳越の關係

吳王闔閭(カウリョウ)楚の平王(楚王の孫)を伐ち、國郡を陥れ、江淮の地を并せたり。後越王勾踐と戦ひ、敗死せしが、その子夫差、越を會稽山(浙江省紹興府)に破りてこれを降し、遂に進んで諸侯を黃池(河南省)に會し、覇を稱せり。(前四八)然るに勾踐は、范蠡(はんし)とともにその虚に乗じて、これを滅ぼし、(前四七)代りて覇を諸侯に稱したり。勾踐の

後、國勢振はざりしかば、楚これを征服(前三三)して、復南方に雄視せり。(五覇中には吳楚を算せず)

第五課 戰國の形勢

春秋の末に及びては、天下の大權悉く大諸侯に歸し、諸侯は各その勢力を養ひて、天下を合併せんことを望みければ、また一人の尊王を説くものなきに至れり。かつ、諸侯は外にいでて會盟に忙はしく、その倍臣は内にありて各勢力を養ひ、專横を極め、遂にその主の國を奪ふものあるに至れり。韓・趙・魏の三氏は、晋を分ちて三國(三)を建て、(前四〇)田氏はついで齊を奪ひ、(前三八)いづれも王命を受けて諸侯に列せり。世はこれより戰國と稱せられ、諸侯競争の舞臺となれり。

陪臣の專横

戰國の七雄

春秋の初期に存せし百數十の諸侯も、大小兼并の極、今は殆ど盡き、よく大國の形勢を保てるもの、北に燕、西に秦、南に楚あるのみ。これらの三舊國と、新興の四國とは、いづれも王號を僭して互にあひ争へり。戰國の七雄と稱するもの即ちこれなり。

秦孝公と商鞅

戰國の初め、齊・楚・魏の三國頗る盛んなりしが、秦の孝公は、商鞅を用ひて國政を一變せり。その要は、主として國を富まし、兵を強くして關東の列國を吞まむとするにありき。

蘇秦の合從策

かくて、洛陽の蘇秦出でて、燕・趙以下韓・齊・魏・楚の六國に説きて、攻守同盟を結ぶに至れり。これを合從といふ。(前三三三)然れども、久しからずして、齊・魏の二國、秦に欺かれて、その約に背きしかば、合從忽ち破れたり。秦の惠文王これに乗じ、張儀をして、連衡の利を六國に説かしむ。策成りて、六國みな秦に服

張儀の連衡策

事するに至りしも、(前三一)ついで張儀の秦を去るや、連衡もまた破れぬ。

合從連衡の説出でてより、遊説の士四方に起り、縦横の策成りては破れ、破れてはまた成り、列國の動搖定まらず。趙は胡地を略して中山を平げ、秦は屢韓・魏・趙・楚を苦ましめ、齊は大いに燕を破りて宋を滅ぼせり。燕の昭王の立ちて、齊の仇を報いむと欲し、樂毅を將としてこれを伐ち、六ヶ月にて、悉く齊の七十餘城を降ししも、即墨(守將)ひとり抜けず。燕軍遂に退きぬ。

秦の遠交近攻

かくの如く、六國の干戈やむ日なきに當り、秦は范雎を用ひて、遠交近攻の策を立てて、遠國と交りつつ盛んに近國を侵略せり。周の赧王これを恐れ、從を列國に約して、秦に當らむとせしも、却つて秦に滅ぼされぬ。(前二五)ついで、秦王政(始皇)

周の滅亡

立ち、李斯の策に従ひて諸侯を離間し、遂に韓を滅ぼし、趙を併せたり。(前二三八年)よりて、燕の太子丹、荆軻を遣はして秦王を刺さしめむとせしかど果さず、魏、楚とあひ前後して滅亡せり。ただ齊はその地秦を距ること遠ければ、最も後れて滅びたり。(前二三一年)かくて、天下は全く秦に統一せられぬ。

第六課 周の制度・學術

制度

周公の大成せる制度は、支那歴代の模範となれるもの多ければ、次ぎにこれを略述せむ。

一、官制

(一、官制) 中央政府に天、地、春、夏、秋、冬の六官を置き、天官には大冢宰(政と統と)、地官には大司徒(教化と)、春官には大宗伯(祭祀と)、夏官には大司馬(兵馬と)、秋官には大司寇(刑罰と)、冬官には

二、封建の制

田制税法

大司空(百工と)と稱する長官を設けて、國政を分掌せしめたり。
(二、封建) 諸侯を分ちて、公、侯、伯、子、男の五等とす。公侯の國は方百里ありて大國といひ、伯は方七十里にて中國といひ、子男は方五十里にて小國といふ。方五十里以下は、府、庸として大國に隸屬せり。また天下を九州に分ち、中央に方千里を劃して王畿となし、その餘の八州は皆諸侯に分領せしめたり。
田租は政府の主要なる歳入なりしかば、最も意を田制に用ひたり。即ち王都に近く、人家稠密にて、土地の狹隘なる所には、家毎に、田百畝(凡わが二町三段)を授け、その十畝の所得を朝廷に納めしむ。これを貢法といふ。また王都に遠く、人家稀少にて、土地廣漠なる所には、井田の法を用ひたり。一井九百畝、その中百畝を公田となし、八家各百畝を得て共に公田を耕し、以て租税に充つ。これを助法といへり。その他、力役および布縷

の制もありき。

兵制は田制に基きて、士卒・兵車・牛・馬を出だし、以て軍を組織し、天子は六軍を備へたり。

刑法は舜の定めし五刑の外、更に刑・髡・辜・肆等の諸刑を加へぬ。

學制は大學(辟雍と)を京師に置き、小學(塾・序・庠と)を地方に設く。諸侯の國もまたこれにならへり。その學課は六藝なれども、特に重きを禮樂に置きたり。また大篆といふ字體は周の世に創作せられたるものなり。

孔子と儒教
春秋に及んでは、周政益衰へ、天下の事日に非なりしかば、孔・老の二子は、これを匡正せむとして立ちぬ。孔子名は丘、字は仲尼、魯の人にして、(前五五)堯・舜の道を述べ、周公を尊び、禮樂を重んじ、仁を説き、國を治め、天下を平にする道を教へぬ。



その弟子の多き實に三千に及べり。諸侯に歴遊して、志を得ざりければ、退て諸經を修定して歿せり。(四前)孔子(七九)その教は所謂儒教の教の基をなし、年を経るに隨ひ、廣く人心を風化するにいたれり。

孔子の廟は、魯の城北

孝子と道教

戰國の文運

にありて、これを聖廟といふ。孔子と殆ど同時に、楚に老子といふ人あり、その説は、無爲自然を教へしものにて、これを道家の祖とす。

戰國の世に至り、思想の束縛おのづから解け、言論、全く自

由となりて、知識の發達を促ししかば、學術盛んに起りて、學者輩出せり。孟子は子思に學びて孔子の學統を承け、仁義を説き性善を唱へたり。また荀子は性惡を唱へて、同じく孔學を宗としぬ。莊子・列子は老子の學説を繼ぎ、楊朱は自愛を主張し、墨翟は兼愛を唱へたり。その他法家には管子・申子・商子あり。兵家には孫子・吳子あり、公孫龍の詭辯術、鬼谷子の縱横學、鄒子の陰陽學もまた大に行はれ、一時は、殆ど儒家の説を壓したり。而して屈原は詞賦にてその間に著はれぬ。

第七課 太古の印度 佛教の興起

印度は支那と共に、世界最舊國の一にて、初めドラヴィダ人の有なりしが、今を距ることおよそ四千年前に、アリアン

太古の印度

人の一種バクトリア地方(アラル海邊、アム・ダリヤ川)より移りて、印度河畔に幾多の部落を建て、千有餘年の後には、遂に全く土民を征服して、ガンダス河の流域を占領し、ここに數多の印度アリアン人の小王國を建設したりき。(前〇年)

かくて社會は、異族征服の結果として、左の四種の階級に分れ、これによりて、大いに文明を阻害したり。ことに在來の婆羅門といふ宗教は、ますます腐敗し、僧族は、これを弄びて、

印度の四階級

種名	族籍	職	業	人種
一、婆羅門	僧族	教學祭祀を掌る		
二、刹帝利	王族	政治軍事を掌る		
三、吠舍	平民	商工農に従事す		
四、首陀羅	奴隸	牧畜等の賤役に従事す		

專横を極め、教弊實に甚だしかりしかば、他姓のものは、その

釋迦と佛

冤抑を訴ふるに由なく、人々すでに救世主の出現を渴望せり。

釋迦(名)は、實名を悉達(シツタツ)喬答摩(キョウタマ)といひ、西紀前五五七年に生れ、孔子と略ぼ時を同うす。中印度ガビラバスツ(ゴラバツ)淨飯(ジヨウハン)王の太子なり。夙に感



釋迦の像

ずることありて、王城を去り、修業六年、三十歳の時、悟道し、佛教を創む。爾來四十年間、布教に従事し、その教理は婆羅門と異なり、一切平等を主とし、因果の理を教へたり。されば、從來久しく婆羅門教の弊害に

苦みたる印度の民は、多くこれに歸依せしが、釋迦の死後、佛教は益弘布し、従ひて婆佛兩教の間に激烈なる争ひ絶えざりき。

モリア朝と佛教

當時の印度中摩揭陀(カガト)國最も強大にて、佛教もまた最も盛んなりしが、チャンドラケパタといふもの奴隸種より起り、代りてモリア朝を建て(前三三)しが、その孫アソカ王(阿育王)印度(中北)を併せ、深く佛を信じて、國教となし、廣く布教に盡力せしかば、東はマライ半島より、西はエジプト・シリアに及び、南はセイロンより、北はペルシアに傳播し、始めて世界の一大宗教となれり。(釋迦の死後百二十年)

アソカの後、佛教は分裂して國勢衰へ、モリア朝は、遂に漢の初に亡びたり(前一九)

外人の侵入

印度には、古來政治上統一の歴史なく、幾多の小國分立し

て、互にあひ争ひしかば、その隙に乗じて、屢、外人の侵入を蒙りぬ。ペルシア王ダリウス嘗て北印度の地を略定し。(前五二)その後マセドニアのアレキサンドル大王は、ペルシアを滅ぼし、西北二印度を略し、パンヂャブ地方を占領せり。(前三二七)後六十年大王死して、部將セリウクスは、また印度を攻めしも、ついで和睦し、シリア(王)となりて、西中兩亞に君臨せり。

第二篇 中古史

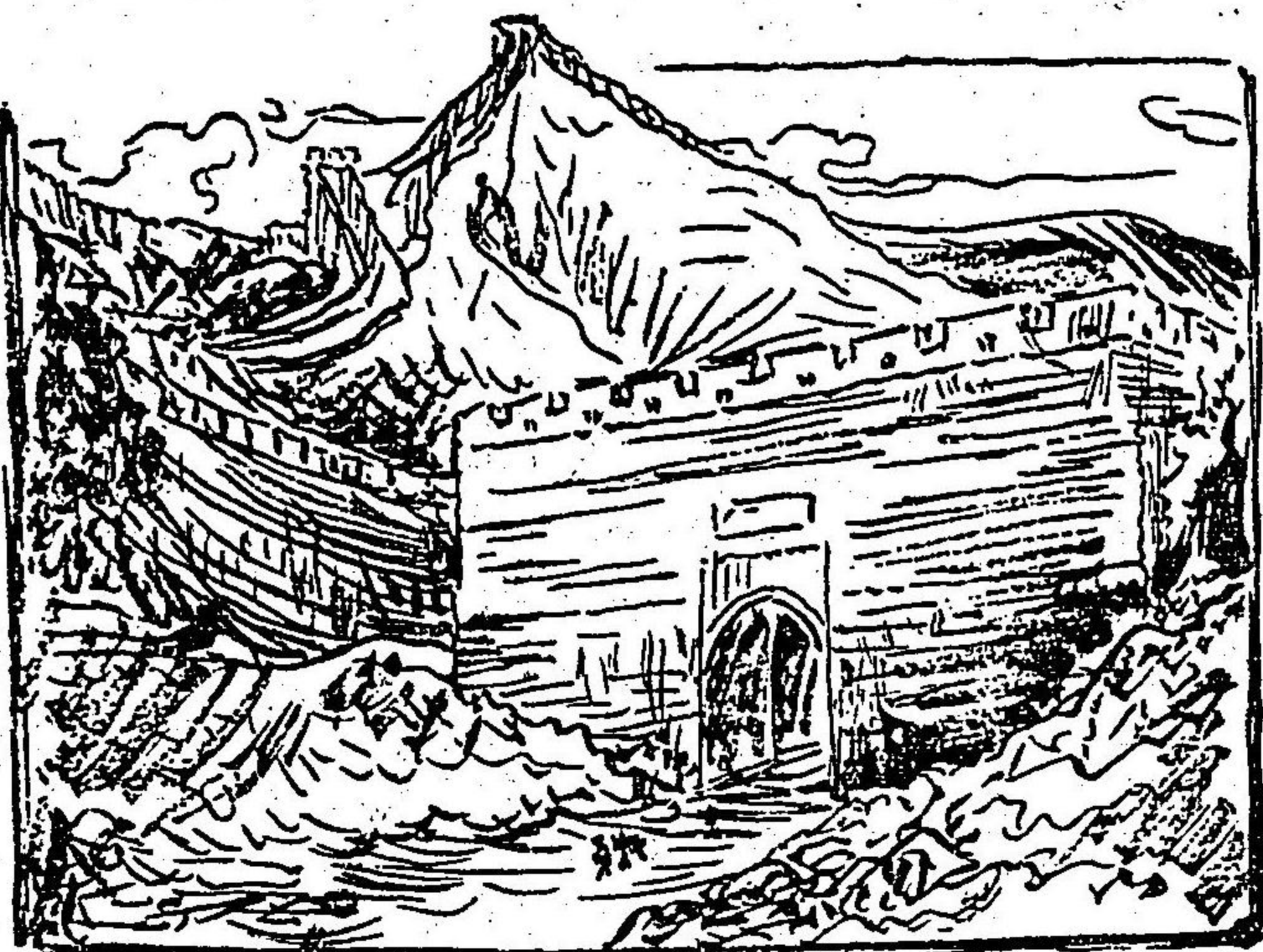
第一課 秦の一統 秦の盛衰

始皇帝の政治

秦王、政、六國を統一するや、謚號を廢して、みづから始皇帝と稱し、咸陽(陝西)に都す。始皇は周室の倒れたるに鑑み、丞相李斯の策を用ひて、中央集權の制を定め、封建を廢して郡縣とし、域内を分ちて三十六郡とし、郡毎に守、尉、監を置き、互にあひ制して、政治、軍務を司らしめ、(縣に令)富豪を帝都に集め、民間の兵器を沒收して、豫め禍亂を防ぎ、また度量衡を一にし、文字を改め、(小篆、隸書は此の時に創まれり)書を焚き、儒生(四百六十餘人)を坑にし、政治を可否する源を塞ぎ、思想、制度の統一を企てたり。或は土木を興して、宮殿(阿房宮等)を營み、屢、海内を巡狩して、帝威を示し、大

始皇帝の外征

いに民心を威壓せむことを圖りぬ。また匈奴・南越に對しても、頗るその國力を輝かしたり。



萬里の長城

匈奴は、トルコ族の一種にて、戰國の末より蒙古地方に崛起し、屢支那の内地に寇せしかば、燕・趙・秦等北境の諸國は、長城を築きてこれを禦ぎたり。始皇も、亦蒙恬に大兵を授けてこれを伐たしめ、(前二一)悉く河南(多^鄂新^爾)の地を略し、更に臨洮(甘肅)より遼東(盛京)に至るまで長城を修築せり。萬里長城これなり。(前二一)かく

秦の衰亂

群雄の蜂起

項羽と劉邦

始皇帝の勢威は、漠北に振ひしのみならず、また兵を出だして南越を略し、今日の安南地方に及びたり。

かくの如く、始皇は夷狄に對して、遠く國威を揚げしかど、内にありては、みづから豪奢を極め、法刑を嚴にせしかば、人民、これを怨みて亂を思ふに至れり。始皇崩じ(前二一)宦官趙高、二世を立てて權を專らにし、政綱大いに紊れたり。よりて陳勝・吳廣、まづ兵を擧げて反せり。爾來、群雄所在に蜂起して、海内沸くが如く、項籍は兵を吳(江蘇省)に起し、楚の懷王を立て、劉邦は沛(江蘇省)に起りて、これと合し、六國の遺臣もまた各地に起り、あひ結びて懷王を盟主とせしかば、兵勢大いに振ひ、項籍(羽)は、黃河に沿ひて西に進み、劉邦は漢水に沿ひて直ちに咸陽に逼る。時に二世は趙高に弑せられ、子嬰位にありしが、出でて降り、十五年にて、秦も亡びぬ。(前二〇)

項羽と劉邦

第二課 漢の統一 漢の初世

劉邦について、項羽も關中に入り、子嬰を殺し咸陽を焚き、恣に諸將を分封し、かつ懷王の約に背きて、漢中(陝西)を劉邦に與へて漢王に封じ、あらはに懷王を尊びて義帝と號し、みづから西楚の霸王と稱して彭城(江蘇省徐州)に都せり。劉邦は漢中に退き、蕭何・張良・陳平・韓信などの英才を用ひ、法を簡にし兵を練り糧を貯へて、時機の至るを待てり。やがて項羽は秦民の怨を買ひ、且つ義帝を弑せしかば、劉邦遂に起ちてまづ關中を略し、洛陽より進みて彭城に逼りしが、羽に破られぬ。羽も漢兵の侮りがたきを見て天下の中分を約し、兵を罷めて東に歸らんとせしに、邦、約に背きて追撃し、これを垓下(安徽)

項羽敗る

高祖の内治

(前二〇)に破りて帝位に登れり。これを漢の高祖とす。(前二〇)

高祖都を長安(陝西)に定め、朝廷の規模は概ね秦制によりしも、地方には、前代の興亡に鑑み、封建郡縣の二制を併用し、郡に守を置き、國に王族・功臣を封ぜしも、韓信・英布・彭越など、異姓の侯王は事に託してこれを除き、専ら同族の子弟を封じて、帝室の藩屏となしぬ。また叔孫通に命じて、制度を定め學術を獎勵せしめしかば、文物大いに起りて漢室長久の基漸く成れり。

匈奴との交戦

漢楚あひ争へる頃より匈奴は、またその勢力を北方に振ひ、頭曼單于の子(單于是其の君長の稱)冒頓單于立ち、漠南漠北の地に據りて、一大邦國を成し、南侵して晋陽(山西)に至る。高祖親征し、却つて白登(山西)に圍まれ、纒に免るることを得たり。(前一九)よりて匈奴と婚を通じ、財貨を贈りて、和親を求め

呂氏の亂

しかば、匈奴これより漢室を侮るに至れり。また南越王趙陀の自立を許し、南方の患を緩べぬ。

高祖崩じ、(五前一九)惠帝嗣ぐ。多病なりければ、呂太后、政を攝し、威權を弄し、恣に諸呂を封じて王となししかば、呂太后崩ずるに及び、その族、亂を作し、漢室まさに傾かむとしたり。幸に宗室の侯王、陳平、周勃など内外力を協せてこれを平げぬ。高祖同族を封じて藩屏とせし效、ここに顯はれたり。

文帝の治

文帝は仁徳勤儉にて刑律を寛にし、農桑を奨め、専ら民力を養ひ、國家大いに安富なりしも、外には南越帝號を僭して、匈奴北境を侵し、内には諸王漸く驕傲となり、宗室を輕んずるに至りしかば、賈誼、カトク鼂錯トコクなど、その弊を痛論せしが、文帝悉くこれを用ふるに能はざりき。

七國の反

景帝立ち、(七前一五)鼂錯の勸に従ひ、頻りに諸王の地を削りし

かば、吳は遂に、膠西・膠東・淄川・濟南・趙・楚の六國と共に兵を擧げて反す。七國の亂即ちこれなり。よりて帝は、周亞夫を將としてこれを討平せしめ、(四前一五)大いに諸王の威力を殺ぎて、後禍を斷ちたり。

第三課 漢の武帝時代

武帝の内治

景帝崩じ、(〇前一四)武帝位に即き、まづ衛綰・董仲舒の言を容れ、大學を設けて五經博士を置き、百家を斥けて儒學を興す。これより儒學は永く支那政教の標準となり、その影響、遠く日本朝鮮に及びぬ。また文藝を奨励せしかば、董仲舒・司馬相如・司馬遷・孔安國などの學士文豪輩出せり。帝はまた神仙の説を好み、封禪を行ひ、樓臺を營み、建元といふ年號を定めたり。

建元の始

これ支那年號の初めなり。

武帝は雄略の人、加ふるに在位甚だ永く、文景、殷富の後を承けて、内はすでに文教を盛んにし、外は更に四方を征して境土を拓き、大いに漢の勢を輝かしたり。ことに武帝の最も力を盡したるは、この外國征服にあれば、次に項を分ちて聊かこれを述べむ。



漢武帝の像

第一節 武帝と西南諸蠻

武帝と南越

武帝と西南夷

江南の地は、夙にコーナチナイチ族の占領せし所にして、秦の時曾て南越を平げしも、その亡ぶるや、南越また獨立して、今の廣東、廣西、安南の地を領せり。その北には、閩越(今の福建)、東甌(今の浙江)の二國起りて、互にあひ争へり。武帝南越の救を請ふにまかせて、まづ閩越を略定し、後二十餘年を経て、南越の亂れに乗じてこれを滅ぼして九郡を置けり。(前一二)その九真、日南の三郡は即ち今の安南なり。また今の雲南、貴州、四川の地も、古來西南夷これを占領せしが、武帝の閩越を平げし後、數年を経て始めは、唐蒙トウモンついでには司馬相如シマサウジ張騫チヤンケンの力によりて、西南二夷も全く平ぎぬ。

第二節 武帝と朝鮮

古朝鮮と箕子

殷亡びて、箕子朝鮮王となる。領域は、遼河・大同江二水の間
に跨れり。箕子の子孫世々王儉(漢平)に都せり。後數百年を経て、
箕準の時燕人衛滿といふもの、その國人を率ゐてきたり投
じ、遂に準を逐ひ、みづから代りて王となりぬ。(前一九四年)

武帝と衛氏の王朝

衛滿は漸く境土を拓きて、勢頗る盛んなりしが、その孫右
渠に至り、屢漢に抗せしかば、武帝海陸より攻めてこれを滅
ぼし、その地を分ちて、四郡を置けり。(前八一年)

三韓

朝鮮半島の南部には、韓種ありて、馬韓・辨韓・辰韓の三部を
なし、馬韓は今の全羅忠清京畿の大部を占め、勢最も振ひし
が、箕準逃れてここに王となり、辰韓(その地はにして今、
南浦)をも兼併して、これを子孫に傳へたり。武帝が朝鮮を滅
ぼしてより、三韓との交通漸く頻繁となり、従ひて當時三韓
と交通せる、わが國と漢との交通も、またこの頃より開くる

に至れり、

第三節 武帝と匈奴および西域

武帝の時に當り、匈奴塞外に雄視せり。帝の外征は、主とし
てこれを挫くにありしかば、朝鮮を平げ、河南を定めたる後
は、専ら力を北征に傾けたり。

武帝と匈奴

漢高祖が婚を通じ、歳帛を贈りて、その侵入を避けしより、
匈奴益ほこり、漢室常に屈辱を被れり。武帝この歷朝の恥を
雪がむと欲し、屢伐て之を破れり。

武帝と西域諸國

當時匈奴の西方に、西域と名づくる大小三十六國あり。そ
の地、概ね今の支那新疆と、露領中央亞細亞とにあり。中につ
き特に著しきは、葱嶺以外なる大宛・康居・大月氏・大夏氏・安息

武帝の晩年

身毒の諸國にて、すでに希臘羅馬の文化を傳へたり。而してこれら西域諸國は、大抵匈奴に服屬せるにより、武帝、張騫を大月氏(今のカラコパ)に遣はし、匈奴を夾撃せむことを計りしかど成らず。かつ騫は途中にて匈奴に捕へられ、留まること十年なりしが、遂に脱して葱嶺を踰え、大宛(今のトコカ)、康居(今のサマルカ)、大月氏(今のアムド)の諸國を経歴して歸れり。武帝、具さに西域の形勢を聞き、再び張騫を烏孫(今の新疆)に遣はしたり(前一年)。すでににして、武帝また西域諸國を征略して、大いに威を振ひぬ。これより、西域との交通盛んに開け、歐洲の文物次第に東傳せり。

かくの如く武帝の世は、漢代の極盛に達し、版圖の廣大なる事、漢の初めに倍せしも、積年の外征と晩年の奢侈とは、國用の不足を招き、遂に白鹿の皮にて、皮幣を作るに至れり。従ひて課稅益重く、酷吏輩出して、内政を亂ししかば、帝頗る悔

いつつ崩じぬ、在位五十四年なりき。(前八七年)

第四課 宣帝の中興と漢の末路

武帝の後を承けて昭帝立ち、霍光遺詔によりて、政を攝し、課稅を軽くして、専ら民力を養ひ、意を内治に注ぎて官吏の治績を獎勵せしかば、對外の政策は大に縮小せしも、中央にも地方にも、良吏輩出して太平を致せり。

宣帝ついで立ち、政を親らし、勵精治を圖り、内は魏相、丙吉などの賢臣を用ひて、海内の平安を致し、外は武帝の雄圖を追うて、國威を匈奴西域に輝かし、よく中興の運を開きたり。宣帝の時に當り、匈奴は兵を四方に交へしかば、帝乃ち烏桓(今の内蒙)、烏孫(今の新疆)、丁零(今の外蒙)等と結んでこれを破り、大いにその勢

光昭帝と霍光

宣帝の中興

宣帝と匈奴西域

を殺さぬ。西域諸國も、また、叛服常なかりしかば、鄭吉、趙充國など前後出征して戦功あり。始めて都護府を烏壘(ウイ)に設け、鄭吉をして天山南北三十六國を統べしめたり。(前六)ついで匈奴も全く漢に内屬するに至れり。

漢の末路

漢の勢威は、かく外に向ひてひろがりしも、元帝の即位(前八)後は、外戚と宦官との黨争甚しく、國運漸く傾けり。成帝立つに及び、宦官石顯などを斥けて、外戚王鳳を親任せしかば、王氏これより威を積み、王莽に及べり。王莽は材略あり、初め巧に名聲を博して、勢力をたくはへ、これより廢立弒逆を恣にし、遂に帝位に登りて、國號を新と稱したり。(西紀八)(以下四紀)

王氏の篡

取に年代の數字のみを記す

王莽は、漢の遺制を變じて、天下の人心を一新せむとし、多く周制に倣ひて官制、田制を改め、制度百般の組織を更へ、或

王莽の新政

王莽の滅亡

は錢貨を改造せしが、事甚だ急激に失し、令繁く、課税重かりしかば、内外の人心を失ひつひに、劉縯、劉秀兵を擧げ、漢の宗室なる劉玄を立てて、帝となし、大いに王莽を破り、進みて長安を陥れ、遂に莽を誅す。莽帝と稱してより十有餘年にて亡びぬ。(二三)

光武帝の統一

第五課 後漢の初世

第一節 光武帝

王莽亡び、劉縯、劉秀の兄弟は、劉玄に忌まれ、縯はその手に殺されたるも、秀は難を遁れて、河北の地を定めしが、將士に推されて帝位に即き、(三五)洛陽に都せり。これを後漢の光武帝といふ。これより、帝は四方不逞の徒を討ちて、漸次これを

光武帝の
施政

平げ、更に交趾の叛を定め、即位より十二年にて、全く天下を統一したり。(三六)

よりて、王莽の諸政を改めて前漢の制に復し、文學を修めて禮節を奨め、西域諸國の交通を謝絶して、専ら心を内治に致し、政權を朝に收めて、よく功臣を全うせしかば、海内これに化し、學術盛んに興り、士は節義を尙ぶに至れり。されど帝の後、明帝・章帝・和帝あひ次いで位に登り、光武の方針を變じて、盛んに外蕃と交渉を開きたり。また明帝の時に、佛敎、印度より傳來せり。

明帝と匈奴

第二節 後漢と匈奴西域

前漢の末には、内地の亂れたるに乗じ、匈奴屢邊に寇せし

鮮卑

も、光武帝の時に及びては、その勢頗る衰へて、南北二部に分れ、南部は漢に内附し、北部もまた和親を乞へり。明帝の時は、北匈奴を伐ちて、大いにこれを破り、和帝は、更にこれを撃ち、餘衆をして、遂に裏海附近に遁逃せしめたりしかば、鮮卑來りてその故地に據りぬ。鮮卑は烏桓と同じく、東胡の一種なるが、今や北匈奴の衰ふるに及び、代りて、漸く北邊に強大となれり。

明帝と西域

西域は、王莽の時、皆匈奴に付き、光武に及んで、漢の都護を請ひしも、聽されずして、交通終に絶えぬ。明帝に至り、班超を西域に遣はして、諸國を威服し、皆匈奴と絶ちて漢に通せしめ、後再び西域都護を置けり。(七四)

章帝の外征

章帝の時、西域反せしかば、班超これを伐ち、漢の威名西域に振ひ、大月氏・安息等も皆使を送り、北匈奴もまた大いに衰

和帝の征略

へ、その南邊は、多く漢に降りぬ。(八七)
 和帝に至り、憲固は、北匈奴を破りて、遠く西に逐ひやり。(八九)
 班超は大月氏を破りて、西域都護に任ぜられ、府を龜茲(車)に置き、(九二)超は、更にその部下をローマに遣さんとせしも、シリアに至り、遂に達せずして還れり。(九七)班超西域にあること三十餘年、年老いて東に歸り、任尙これに代りて、統御の道を失ひしかば、匈奴は西域に通じ、威令また諸國に行はれずなりぬ。順帝の時、西域諸國を復せしも、葱嶺以外は、絶えて漢に通せざりき。

羅馬との交通

當時歐洲にては、ローマその旺盛を極め、遠く、シリアを併せ、漢とあひ對して、世界東西の二大國をなし、桓帝の晩年には、羅馬の使者、印度洋を渡りて始めて來航し、(一〇六)これより、三國に至るまで交通貿易已まざりき。

第三節 東方諸國

漢の武帝の時、古朝鮮を伐ちて郡を置きしが、威令漸く行はれず、その後、朴赫居世といふもの辰韓の故地に起りて、新羅國を創建し、(七五)ついで辨韓をも併吞せり。またツンクス種の一なる扶餘人、朱蒙は、ツンガリ江畔より南下して、沸流水(鴨綠江の上流)附近に高句麗國を建つ。(七三)その次子溫祚といふもの、馬韓に入りて、百濟國を建て、(七一)ついで全く、馬韓を滅ぼせり。かくて、新羅、百濟は、三韓の故地を分領し、高句麗は、古朝鮮の地に據りて、互にあひ争へり。これを後三韓といふ、而してわが垂仁帝の朝に來朝して、任那の國號を賜はりし加羅國は、辨韓の地にありて、金首露の創めし國なり。(東漢初)

任那

後三韓

扶餘

日本と韓

漢と倭奴

高句麗と漢

後三韓中、新羅國最も盛んにて、またわが國に近ければ、わが西邊を騷がし、或は任那を侵ししかば、皇紀八六年(二〇〇年、後漢末)神功皇后これを征服し、ついで百濟を降しぬ。應神帝の時には更に任那府を置きて、(三四年)二國を統制せり。武帝、古朝鮮征略の結果として、わが國人と漢との交通また従つて開け、西漢の末、特に東漢の初めよりは、わが九州地方の土酋など、漢に私貢して、印綬を受くるものあるに至れり。漢の倭奴國王といはれたるもの即ちこれなり。

高句麗は國の初めより屢漢と交渉をなし、後漢に及びては遼東を侵し、その衰ふるや、遂に叛けり。

第六課 大月氏および印度 佛教の東漸

大月氏

安息、大夏の興起

カニシカ王と佛教

大月氏は、サベット種に屬し、秦漢の時には、威を印度河の西に張りしも、一たび匈奴に逐はれて、イリー地方に行き、更に烏孫に侵されて、媯水(今河)に走れり。會セリウクス(五前二)の建設せしシリアの衰へたるに乗じ、安息は、波斯の地に據り、(五前二)大夏(バクト)は、媯水の畔に起れり。その後、大夏は安息に敗られ、やがて大月氏に滅ぼされたり。(六前二)

大月氏、更に、媯水近傍の地を略して、勢次第に盛んとなる。その後、カニシカ王(六前四)出でて、勢甚だ強大に赴き、遂に全く、北西印度を征服し、大いに佛教を信奉せり。これより先き、佛教は恒河を界して、南北二部に分れ、河南の佛教はマカダによりて、常に河北の佛教を壓したりき。

モリア朝の滅後、マカダの朝廷常に振はざるに乗じ、アンドラ家南より起りて、遂に中印度を併略せり。(六前三)爾來、婆羅

門教を奉じて、佛教を抑へしかば、河南の佛教俄に衰へたり。會カニシカ王の崇佛により、河北の佛教代りて、これにより。王の歸依は、甚だ深く經文を大成して、益、布教に盡力し、いはゆる大乘佛教は、北印度に盛んに行はるるに至れり。これ實に後漢の初めの事なり。(後漢の初め)その後、龍樹、无著、世親等の高僧續出して、屢、佛教を興復したりき。

大月氏はカニシカの後、勢次第に衰へしかば、南西印度のグプタ(初メ九三九年カニシカに起る)これを破りて、北印度を定め、以後ブライマン教を奉ぜしかば、佛教の勢力全く印度を去りぬ。安息のローマに敗るるや、アルゲシルこれを滅ぼし、(六三三)ペルシアを興して拜火教を奉じ、大月氏、ローマに勝ちて、威を西亞に振ひしが、後、エフダル(古種)に破られたり。よりてエフダル印度の北西を略し、ペルシア、柔然と争ひ、また後魏に通じぬ。

グプタ、波斯、暹羅の興亡

佛教の分派と傳流

かくてカニシカ王以來の南方佛教は、(所傳小)錫蘭島を中心として、南海のビルマ、シヤム、シヤワ等に傳播し、北方佛教は(大乘)北印度・中亞細亞より、天山南路の西域に及べり。支那には漢の武帝の頃より私かに傳はりしが、後漢の明帝は、公けに人を西域(大月)に遣はして、佛像經典および二僧を伴ひ歸らしめ、白馬寺を洛陽に建てたり。(六三)三國以後には、東西僧侶の往復頻繁なるに連れて、佛教漸く盛んなりき。

佛教の東漸
一、支那

後漢の衰運

第七課 後漢の衰亡

和帝立つに及び、外戚始めて權を專にす、その後の諸帝は、不幸短命にて崩じ、幼主後を承け、母后朝に臨みければ、外戚と宦官とは、專權の機會を得、遂に後漢滅亡の運を開けり。桓

グプタ、
波斯、
の興亡

門教を奉じて、佛教を抑へしかば、河南の佛教俄に衰へたり。會カニシカ王の崇佛により、河北の佛教代りて、これにより。王の歸依は、甚だ深く經文を大成して、益、布教に盡力し、いはゆる大乘佛教は、北印度に盛んに行はるるに至れり。これ實に後漢の初めの事なり。(後漢の)その後、龍樹、无著、世親等の高僧續出して、屢、佛教を興復したりき。

大月氏はカニシカの後、勢次第に衰へしかば、南西印度のグプタ(初カニシカに起る)これを破りて、北印度を定め、以後ブラーマン教を奉せしかば、佛教の勢力全く印度を去りぬ。安息のローマに敗るるや、アルダシルこれを滅ぼし、(三ニ)ペルシアを興して拜火教を奉じ、大月氏、ローマに勝ちて、威を西亞に振ひしが、後、エフダル(古種)に破られたり。よりてエフダル印度の北西を略し、ペルシア、柔然と争ひ、また後魏に通じぬ。

佛教の分
派と傳流

佛教の東
漸
一、支那

後漢の衰
運

かくてカニシカ王以來の南方佛教は、(所謂小)錫蘭島を中心として、南海のビルマ、シヤム、シヤワ等に傳播し、北方佛教は、(大乘)北印度、中亞細亞より、天山南路の西域に及べり。支那には漢の武帝の頃より私かに傳はりしが、後漢の明帝は、公けに人を西域(大月)に遣はして、佛像經典および二僧を伴ひ歸らしめ、白馬寺を洛陽に建てたり。(六七)三國以後には、東西僧侶の往復頻繁なるに連れて、佛教漸く盛んなりき。

第七課 後漢の衰亡

和帝立つに及び、外戚始めて權を專にす、その後の諸帝は、不幸短命にて崩じ、幼主後を承け、母后朝に臨みければ、外戚と宦官とは、專權の機會を得、遂に後漢滅亡の運を開けり。桓

外戚宦官の禍

黨錮の禍

張角と卓

群雄の割據

曹操

帝の時、陳蕃、季膺、郭泰など氣節の士、宦官を惡み、大學生を率ゐて盛んにその非を鳴らししかば、宦官これを忌み、その徒を捕へて獄に下しぬ。(一六六)これを黨錮の禍といふ。

宦官内に、權を弄し、名士外に殺害せらるるに及び、大平の望みも全く絶え、人心益搖き、帝室まづ亂れ、叛亂四方に起りぬ。張角まづ亂を作す。これを黃巾の賊といふ。次いで、袁紹は、宦官二千餘人を誅戮せしも、董卓は、恣に獻帝を立て、驕横なりしかば、紹は、關東の諸將を帥ゐて卓を伐つ。卓敗れ、やがてその臣呂布に殺さる。かくて、天下はすでに無政府の狀に陥り、諸將もまた互にあひ反目し、袁紹、袁術、曹操、孫堅、劉備など、遂に各地に割據するに至れり。

群雄中曹操の勢望甚だ盛なりしが、獻帝の洛陽に歸るや、迎へてこれを挾み、まづ呂布、袁術を滅ぼし、袁紹を破り、次いで

で烏桓を平げ、更に南下して劉琮を降し、悉く河の南北を略定せり。(一七〇)

孫權

これよりさき、孫策はすでに江東を徇へしが、その死後弟權これに代り、勢頗る振ふ。劉琮の亡ぶるや、劉備(漢族)援を孫權に乞ふ。その將周瑜は、操の大軍を赤壁(湖北省武昌府)に逆へ撃ちて大いにこれを破れり。(一七〇)

劉備

劉備は、諸葛亮を用ひて荊州を取り、更に巴蜀漢中を定め、これに據り、(一七二)操權とあひ對して三國鼎立の勢をなししも、獻帝を擁せる操の勢力最も強大なりき、その子丕は、遂に帝位を奪ひて洛陽に都す。これ魏の文帝なり。(一七三)劉備も帝位に即きて、成都(四川)に都す。蜀の昭烈帝これなり。ついで孫權も帝と稱して、建業に都す。これを吳の太帝とす。かくて後漢亡び、天下は三分せられたり。

漢の滅亡と三國鼎立

第八課 三國の鼎立 晉の初世

三國の大勢

今、魏・蜀・吳の形勢を案ずるに、魏は天下樞要の地を領し、土地最も廣く、人材最も多し。吳は江東を保ちて、土地人材最も次ぐ。蜀は西方山間の地に僻在して、土地最も狭く、人材最も少なきも唯英傑諸葛亮(亮)ありて、天下三分の業を立てたり。かく魏の勢力最も盛んなりしかば、吳蜀は相結んでこれに當れり。昭烈帝は曾て吳が關羽を攻殺せしを憤り、みづから吳を伐ちしも、反つて夷陵(湖北宜昌府)に敗れ、ついで崩せり。(三三)

諸葛亮、後帝を輔け、吳と和せしかば、魏の文帝も志を吳に得ずして崩じ、明帝嗣げり。忠誠なる諸葛亮は軍國の衝に當り、漢業を恢復し先帝の恩に答へんと欲し、屢魏を伐ちしも、糧食常に乏しく、魏將司馬懿またよく防ぎければ志を得ず。

魏蜀の交

孔明歿す

三國の滅亡

私かに力を養ふこと三年、再び師を起し、吳(太)と約して、共に魏を伐ち、亮は司馬懿と五丈原(鳳翔)にあひ持し、遂に陣中に歿せり。(三三)



諸葛亮の像

諸葛亮の死後は、蜀の勢力漸く衰へたり。司馬懿は軍功によりて勢威漸く強く、子の昭に至り、恣に廢立を行ひて、政柄全くその手に落ちぬ。かくて蜀を伐ち、後帝を降ししかば、昭の威權益加はり、子、炎に及び、遂に帝位を奪へり。これ晋世祖武帝なり。(三六)吳は蜀・魏に後れ、なほ江東をもちしが、晋武帝、その亂れたるに乗じて、建業を

晋の統一

昭れ、帝皓(太帝の子)を降せり。かくて、天下は遂に晋に統一せられぬ。(三十八年)三國分立より、ここに至るまでおよそ六十年なり。

第九課 晋および五胡十六國 (その一)

西晋の初世

武帝即位の後、魏の敗滅に懲り、その一族を要地に封じて、帝室の藩屏とせしが、反つて後年専横の患をのこせり。惠帝嗣ぎ、賈后政を専にするに及び、諸王交起りて政權を争ひ、海内紛亂を極むること、七年の久しきに及び、これを八王の亂と云ふ。(八王は汝南王亮、楚王瑒、齊王冏、河間王顒、成都王穎、長沙王又、東海王越なり)かくて、國力全く衰へしのみならず、當時、晋の士大夫は、老莊の學を尙び、清談の風流行して、實務を卑しむ、家國を憂ふる者なかりしかば、北方の五胡に蹂躪せられ、愍帝の時、遂に胡人劉氏に滅ぼさるる

八王の亂

胡人の南漸

に至れり。

漢の時より境域の廣大となるに従ひ、夷狄の内地に移りて、漢人と雜居するもの漸く多く、殊に漢末の争亂によりて、愈その數を増し、晋の武帝、州郡の兵備を廢するに及びては、夷狄の南漸益甚しく、中にも匈奴、鮮卑、羯、羌、氐の五胡最も強大なりしが、晋の衰へたるに乗じて各地に崛起せり。

五胡總説

匈奴は、東漢以來、連りに漢人と雜居し、戸口益繁殖し、晋初には、すでに今の山西の大部分を占領せり。羯は匈奴の別種にて、鮮卑は東胡の同族なり。東胡が漢の初め匈奴に破られ、その餘衆走りて、烏桓山(内塞)を保ちしものを烏桓といひ、鮮卑山(内塞)に據りしものを鮮卑といふ。烏桓は曹操に滅ぼされしも、(五十六年)鮮卑の勢力は益振ひ、今の滿州、遼東の地を併吞せり。氐と羌とは、いづれもナベツト族にて、三國より、西晋の

五胡の蜂起

際には、關中の地に雜居するもの甚だ多かりき。
 かくの如く、黃河以北および關中には、胡族の雜居するもの甚だ少なからざりしが、八王の亂に際し、匈奴族の劉淵、まづ亂を唱へ、自立して國を漢と號し、(三三〇年)平陽(山西府)に都す。羯人石勒これに従ひ、氏の李雄は、成都に據りて帝と稱し、後に漢と改む。鮮卑の慕容廆は、大棘城(遼東)に起りて大單于と稱し、羌の姚弋仲も南安に起りて扶風公と稱し、拓跋猗廬は上谷(直隸)に據りて可汗と稱し、同族慕容氏に通ぜり。劉淵連りに晋に迫りしが、その子聰に及び、石勒劉曜を將として晋を伐たしめ、洛陽を陥れ、懷王を殺し、次いで愍帝を執へたり。(三三二年)愍帝降りて、西晋亡びしかば、司馬懿の曾孫瑯琊王睿は位に建康(吳の南京)に即き、河東を保てり。これを東晋の元帝といふ。(三三二年)帝は王導、庾亮、祖逖などの名臣に任じて、やや中興の

晋室の中絶

東晋の元帝

前趙と後趙

前秦

前燕

機運を作りたれど、幾程もなくして王敦亂をなし、(三三三年)成帝の世には、蘇峻の亂ありて、晋室振はず。また北方の快復を圖ること能はざりき。

漢の劉聰死し、劉曜長安に自立して、趙王と稱し、(前)石勒は、またその地を略して自立し、襄國(直隸省)に都し、國を趙と號す。(後)石勒遂に前趙を滅ぼし、全く漢(漢)の故地を領して北方に雄視し、さらに羌を降せり。(三三三年)子虎立ちて都を鄴(河南省)に遷し、兵を四隣に出たししが、その將蒲洪(人)關中に據りて姓を符と改め、子健遂に帝と稱して、國を秦(前)と號せり。(三三五)虎の死後久しからずして、燕に滅ぼされたり。(三三五年)

慕容皝は、また棘城(遼東)にありて、國を燕(前)と號し、高句麗を破りしが、皝の後、僞立ちて、後趙を滅ぼし、鄴に都せり。(三三五)この外冉閔(魏)張重華(蜀)拓跋什翼犍(代)等の興亡、當時甚だ頻

繁なりき。

第十課 東晋および五胡十六國 (その二)

東晋の北伐

前秦北方を統一す

東晋は内亂あひ次ぎ、康帝の時、江北の回復を圖りしも成らず、穆帝、桓温を用ひ、始めて大いに北征の師を起し、まづ巴蜀の地を恢復し、ついで洛陽を復し、頗る威を中原に振ひたり。苻健の死後、苻堅自立し、(三七)王猛を用ひて富強を力めしかば、勢力日に強大となり、悉く北方を統一し、(三七)その領地はほぼ天下の大半を占めたり。堅更に高句麗、新羅、西域諸國を征服し、塞外諸國の來貢する者、六十餘國に及びしといふ。苻堅は勢に乗じて、天下を一統せむと欲し、大軍を擧げて南下せり。東晋の孝武帝謝玄を將として、これを防ぎ、大いに

淝水の役

魏の江北統一 (北朝)

宋の江南併有 (南朝)

秦軍を淝水(安徽)に撃破せり。(三八)堅も、また部下に殺されてより、秦俄に衰へ、江北は四分五裂せり。かくて諸酋一時に崛起し、皆國號を稱す。その中、後魏最も強く、後燕(遼寧)、後秦(陝西)これに次ぐ。後魏の拓跋珪は、初代王と稱せしが、後燕を破り、帝と稱し、平城(山西大同)に都す。(三九)これを魏道武帝とす。孫太武帝(四二)武略あり、遂に江北を一統せり。東晋は淝水の戦後、北方の分裂によりて、やや太平なりしも、内亂常に絶えず、國勢日に非なり。安帝の時、劉裕といふもの叛臣を誅し、功を内外に立て、威權並ぶものなく、遂に帝を弑し、恭帝を立てしが、次で、その位を篡へり。(四三)これを宋武帝といふ。また建康に都せり。これより以下南北朝時代となる。晋の八王の亂以來、ここに至るまで、およそ百三十餘年間、塞内に割據せし五夷族の國を建てしもの十六ありしかば、

これを五胡十六國の亂といふ。今左にその主要なるもの。興亡表を示さむ。

北方諸國興亡表

國	始祖	人種	都城	興亡年代
後燕	慕容垂	鮮卑	中山	三七四三
後秦	姚萇	羌	長安	三八一八
西燕	慕容冲	鮮卑	甘肅	三三三三
西秦	乞伏乾	鮮卑	甘肅	三三三三
後涼	呂光	氐	姑臧	三四三三
後魏	拓跋珪	鮮卑	平城	三三三三
南燕	慕容暉	鮮卑	廣固	三三三三
西涼	李暠	漢人	燉煌	四四四四
南涼	秃髮傉	鮮卑	甘肅	四四四四
北涼	沮渠蒙	鮮卑	甘肅	四四四四
北夏	赫連勃勃	匈奴	統萬	四四四四
北燕	馮跋	漢人	龍城	四四四四

第十一課 南北朝の世上

南北朝は江南にあるによりて南朝といひ、後魏は江北にあるによりて北朝といふ。かくの如く漢人と夷狄と南北に對立し、天下は二大國に分れて、戰爭已む時なし。

三國以來支那は争亂あひ繼ぎ、西域諸國との交通も中絶したりしかど、後魏太武帝は威を四方に振ひければ、西域の諸國多く來貢せり。ひとり柔然は服せざりければ、屢これを討伐せり。柔然は、東胡の一種にて、東晋の初め、國を匈奴の故地に建て、大いに振ひ、屢魏を侵し、一旦道武帝に破られしも、また勢を得たり。後太武帝これを破りて、蒙古の地を略したり。

宋は武帝帝義符文帝あひ傳へ、この間林邑を服し、また扶南ジャッ(暹)に通せり。文帝は後魏の太武帝が柔然の經略に暇なきを見て、北侵せしかば、太武帝逆へ撃て、これを破り、追

南北朝
後魏と外征
柔然
宋の外征
宋後魏南

北朝の交

朱齊の興

後魏
孝文帝

齊梁の興

撃して楊子江に迫れり。(四五年)これより宋の勢振はざりき。文帝崩じて後は、政權全く蕭道成の手中に歸し、明帝の時には、淮北、淮西を後魏に奪はれたり。道成、遂に爵を進めて齊王となり、次いで帝位を奪へり。(四七)これを齊太祖高帝とす。後魏の勢は益盛にて、太武帝よりあひ傳へて、孝文帝に至り漢人の文化を尙び、制度、禮樂を更へ、都を洛陽に遷し、(四三)鮮卑の習俗を變じ、姓を元と改めたり。かくて帝の治世は大いに文化を揚げたれど、遂に優柔の弊を生ずるに至れり。齊は高帝の崩後、弑虐あひ續きて争亂絶えず、明帝に及んで、屢後魏の侵略を被れり。最後の帝、寶卷は、殊に驕奢を事とし、政甚だみだる。蕭衍といふもの、荊州の刺史として、襄陽(北朝)にありしが、兵を舉げて建康を攻め、寶卷を弑して、みづから帝位に登れり。(五〇)これを梁武帝といふ。

第十二課 南北朝の世 下

後魏の分裂

武帝と侯景

南遷以來は、後魏の武力漸く衰へ政綱頗るみだれ、内亂あひ次げり。高歡といふもの、孝武帝を立てて、みづから權を專にせしかば、帝、長安に奔りて、關西の大都督宇文泰によれり。これを西魏とす。高歡は、更に孝靜帝を鄴(河南)に立てて東魏といふ。(五三)かくて魏は分れて東西二國となれり。梁武帝深く佛教を信じて、政事を力めざりしも、北朝の争亂にまぎれて、幸に南朝は事なきを得たり。東魏の侯景、梁に降りしかば、武帝大いに喜びしかど、南北の和成りければ、遂に反して、武帝を幽し、憂鬱の間に崩せしめたり。(五四)諸王ついで争ひ起り、梁大いに亂る。武帝の子蕭繹は、侯景を誅して、

北齊
後梁
陳
北周
梁武帝

帝位に即き、江陵(湖北荊州)に都せり。これを元帝といふ。(五五)



梁武帝の像

東魏の高氏あひ次ぎて政を執り、高洋にいたり、梁の亂に乗じて、淮南を略し、遂に帝位を奪へり。(五五)これを北齊文宣帝といふ。この時、宇文泰、西魏の國政を執りて、國內平安なりしが、梁武帝の孫蕭詧を援けて梁を攻め、元帝を殺して、誓を立てたり。これを後梁宣帝といふ。(五五)實は西魏の一藩たり。また陳霸先は、元帝の子を擁立せしが、ついでこれを廢し、みづから帝位に登れり。(五五)これを陳武帝といふ。この

北齊
周の滅亡

隋の海内統一

年、宇文泰の子、宇文覺、また西魏の禪を受けて帝位に登れり。これを北周孝愍帝といふ。かくて江南は陳となり、江北は北齊、周となり、塞外にては、柔然亡びて突厥興れり。

北周は、突厥と結びて北齊と争ひしが、宇文護、專横を極めたりしかば、孝武帝立ちて、まづこれを誅し、また、北齊の衰亂に乗じ、これを滅ぼし、(五七)全く江北を併せしも、たまたま突厥と事を生じ、宣帝嗣ぎ、突厥と和して陳を攻め、その勢盛んなりき。すでにして、外戚楊堅、政權を専らにし、遂に靜帝の位を奪へり。これを隋文帝といふ。(五八)

隋文帝は、南北を合一せむとして、まづ突厥を破り、黨項、吐谷渾を征し、更に後梁を下して、一方を統一せり。このとき陳の叔寶奢侈にて民心を失ひしかば、一舉してこれを滅ぼせり。(五八)東晋以來二百七十二年、南北分裂以降、茲に一百五十

年をへて、海内再び統一しぬ。

第十三課 隋の世 唐の興起

文帝の政事

文帝は、争亂の後を承けて、意を政治に専らにし、外は突厥を鎮め、高句羅を伐ちて、日本、百濟に通じ、内は勤儉を尙びて課税を軽くし、刑法を寛にし、かねて南北の學を採用せり。よりて人民積年の疲弊を醫するを得て、國家殷富なるに至れり。然るに太子は、文帝を弑して自立せり。隋の煬帝ヨウダイとは、これなり。(四年)

煬帝の豪華

煬帝は豪華を好み、大いに土木を起して、數多の宮殿・園池を營み、運河を開きて、巡遊に便し、また、長城を増築して、人民を苦役せしかば、丁男足らずして、婦女を使役するに至れり。

煬帝の外征

帝は、また遠征を好み、北は、東突厥を降し、西突厥を破り、南は、コータを伐ち、西は吐谷渾を破りて、西域諸邦を招き、東は琉球(琉球)を降し、百濟・新羅に通じて、日本に交はれり。(七年)かくて國威は、四方に振ひしも、民力はつきて天下皆亂れんことを怖るるに至れり。

隋の末路

たまたま高句羅を征し、(六年)却つて、遼東に大敗せしかば、禍亂の機ここに熟し、群雄四方に蜂起し、帝と稱し王と稱して、互にあひ争へり。唐公李淵も、次子世民の勧めに従ひ、また兵を晋陽(山西)に擧げ、東突厥の援を借りて、長安を取り、恭帝を立てしが、淵ついで、その禪を受けたり。(八年)これを唐高祖とす。當時煬帝は、なほ江都(江蘇)にありしが、臣下に弑せられ、やがて隋も亡びぬ。

群雄の蜂起

唐の興起

唐の一統

貞觀の治

第十四課 唐初の内政 制度

高祖即位の後、世民の力に依りて、海内を統一せしかば、位をこれに禪れり。(五九)これを太宗といふ。太宗は、房玄齡・杜如晦・魏徵・王珪などの名臣を用ひて、意を政事に注ぎ、制度を改め、武備を嚴にし、學校を設けて學術を獎勵し、從來弊害ある官吏登庸の法を改めて、人材を導き、奢侈を戒めて賦役を減じ、また李靖・李勣などの良將を擧げて、軍事を委ねしかば、國威外に揚がり、太平の聲みちたりき。後世、これを貞觀の治と稱す。

貞觀年中に大成せる制度は、頗る完備したるものにて、ひとり、支那歴代の模範となりしのみならず、朝鮮および日本中古の制度も、これに則りたるもの甚だ少なからず。

官制

中央政府には、三師・三公ありて天子の師範を司り、六省(尚書・中書・門下、殿中、秘書、内侍)ありて、政府を組織し、その中、尚書・中書・門下の三省は、大政を統べ、その長官は、宰相の權を有す。殊に、尚書の權最も重



唐太宗の像

く、その内に六部(禮部、兵部、刑部、工部、戸部、度部)ありて、政務を分掌す、これらを總稱して京官といふ。

地方の制度たる、天下を十道に分ち、各道に巡察使を置きて、府・州・縣を監察す。府に牧尹、州に刺史、縣に令ありて、民治に當る、これらを總稱して、外官といふ。

刑法

刑法には、笞杖徒流死の五種あり。笞は十より五十にいたり、杖は六十より百に及び、徒は一年より三年を限り、各五等に分れ、流刑は二千里より五百里を増して三千里を限り、死刑は絞斬の二等に分れたり。皆相當の贖罪法あれども、君父に對する大惡は、これを贖ふこと能はざるものとせり。

兵制

各十道に、六百三十四の折衝府セツクブを設け、折衝都尉セツクトウブこれを統べて地方を鎮む。府に上中下の三等あり、上は千二百人、中は千人、下は八百人より成り、毎年交代して京の宿衛に當る。二十歳にて兵となり、六十歳にて免せらる。府兵の法とはこれなり、後曠騎カウキの法、藩鎮の兵あひ次いで起れり。

田制と税法

田制は、均田の法を行ひたり。年十八以上の男子には、田百畝を給し、内八十畝を口分田、二十畝を永業田といふ。税法には租庸調の三種あり。租は田税にて、百畝につき、粟二石(斗餘)

學制と科擧

庸は、口税にて、毎年二十日間公役に就く。調は戸税にて、絹麻等の産物を納れしむるものなり。

學制は、京師に國學、大學、四門學、律學、書學、算學、弘文館、崇文館等を設け、地方には、府學、州學、縣學等を置きて、經書を教科となし、また秀才、進士、明經、明法等の考試を定めて、士を登庸せり。

第十五課 唐の中世

武后の亂

太宗崩じ(九六四年)高宗嗣ぐ、初め、帝は、褚遂良、長孫无忌の補佐を得て、内治の功を奏せしかど、武后を寵し、政權を委ねてよ、り、女禍の端を開けり。高宗崩じ(六八三年)中宗立しも、武后恣にこれを廢し、弟旦(廢帝)を立てて、政を攝し、ついで、宗室大臣を殺し、

韋氏の禍

遂にいはいゆる則天武后となりて、國號を周と改めたり。(六九) 武后内行甚だ修らざりしも、權略に富みて、治才あり、よく狄仁傑・張柬之などの人材を用ひしかば、天下亂れざるを得たり。武后の病むや、柬之これに迫りて中宗の位を復せしが、韋后、また朝政に與りて權を擅にし、遂に中宗を弑し、廢帝を立てて、政を專にす。より



則天武后

て、睿宗の子隆基、兵を起して、韋后およびその黨を誅し、睿宗を迎へて位に復し、(七一) 次いで、その讓を受けたり。これを立宗となす。

(七一)

開元の治

立宗即位の初め、心を政事に傾け、姚崇・宋璟などを用ひ、内は文運を盛んにして、國家太平に赴き、外は邊境の要地に、十節度使を置きて、四方を鎮撫し、國勢内外に振へり。後世これを開元の治と唱へ、貞觀の治と併せ稱す。

立宗の在位久しきに從ひ、漸く驕奢に耽り、國政を姦臣に委ねて楊妃を寵せしかば、つひに安史の大亂を生ずるに至れり。

安史の亂

安祿山は胡人にて、機略あり。楊貴妃の意を迎へて大いに立宗に信任せられ、累進して、東平郡王となり、漸く、異心を懷きしが、遂に兵を擧げて反し、直ちに洛陽を陥れ、大燕皇帝と稱せり。(七五) 顔真卿・郭子儀・李光弼・張巡・許遠など各義兵を擧げて防ぎしも、賊軍遂に長安に迫るや、立宗は蜀に奔りて、位を肅宗に傳へたり。(七六) やがて回紇の援兵至り、官軍漸く振

杜蕃・南詔の入寇

ひ、祿山は、その子慶緒に殺され、賊將史思明、また、慶緒を殺して、燕帝と稱せしが、李光弼に破られ、幾程もなく、思明も、その子朝義に殺されたり。時に代宗立ちて、再び兵を回紇に乞ひ、諸軍を合せて賊を破りしが、賊將李懷仙、朝義を殺して降りければ、安史の亂八年を費して全く平定せり。(三七六)

安史の亂にて、邊備全く廢れしかば、塞外の諸藩これに乗じて、連りに入寇せり。吐蕃は回紇と共に屢來侵せしも、郭子儀の力によりて事なきを得たり。その後南詔部、杜蕃に叛きければ、勢力次第に衰へ、遂に和を唐朝に乞ふに至りしかど、南詔は猶屢南境を侵せり。加ふるに唐の内部には藩鎮、宦官の憂起りて、遂に唐室の傾覆を招くに至りぬ。

第十六課 唐の末世

藩鎮の跋扈

高宗は節度使を幽州に置き、玄宗の時、更に十節度使(北安、西平、盧、南、劍、南、東、西、南)を邊境の要地に設けて、これに財政、兵馬の權を授け、各數州を統べしめたり。安史の亂後は、内地の諸道にも節度使を置き、且つ賊の降將をもこれに任じたりしが、藩鎮の勢は漸く加はり、その職を世襲にして、專横愈甚しく、或は僭して帝王を稱するものあるに至れり。殊に魏博、平盧、盧龍の三鎮(北河)最も驕暴にて、朝命を顧みざりしも、德宗これを制すること能はざりき。その後、順宗を経て憲宗(六八〇)に至り、杜黃裳、裴度などを用ひて、大いに綱紀を張り、西川、鎮海の二鎮を討伐せしにより、一時やや藩鎮を制することを得たりしも、(六八二)全く禍根を除去すること能はざりき。

外に藩鎮の難あるに加へて、朝廷には宦官の横恣甚しく、

宦官の横恣

次第に唐室の衰運を招けり。宦官は玄宗の時より漸く權威を積み、徳宗以後は、軍國の事に參與し、朝政を握りて遂に廢立を恣にし、憲宗、敬宗は皆その弑に斃れたり。文宗はこれを憤り、鄭注、李訓と誅滅を計りしも果さず、たまたま朋黨の争あるに乗じて、宦官益暴威を逞うせり。

朋黨の争

藩鎮の跋扈、宦官の横恣、朋黨の争は、實に唐朝衰滅の三大原因なりといふべし。黨争は穆宗に始りしが、文宗のとき、李徳裕は李宗閔、牛僧儒と隙を構へ、互に黨を結びて政權を争ひたり。爾來兩黨の反目已ます、政令大いに紊れたり。宣宗(八の世に至りて、李徳裕、李宗閔などあひ次いで死し、四十餘年にて黨争纒に已むを得たり。

唐の衰亂

かくて、藩鎮と宦官との禍は、なほ依然として存せり。加ふるに暗君あひ繼ぎ、奢侈を好み、課税を重くせしかば、百姓は

李克用

流難し、盜賊四方に起れり。黃巢は、河南を掠めて洛陽を陥れ、次いで長安に入り、みづから齊帝と稱しぬ。(八沙陀の別種の部長李克用は、朝命を奉じて黃巢を破り、長安を回復し、後連りに軍功ありしかば、昭宗(八封じて晋王となしたり。賊の降將、朱全忠(朱宣武の弟)は、昭宗の召に應じて長安に入り、悉く宦官を殺しぬ。全忠、異志を抱き、宗昭に逼りて都を洛陽に遷ししかば、克用など皆唐室の復興を名として兵を擧ぐ。全忠、遂に昭宗を弑し、哀帝を立て、次いでその位を篡ひたり。(九唐は高祖より二十世、二百九十年にて亡びぬ。

朱全忠

唐亡ぶ

第十七課 唐の外征および交通

第一節 外交一般

唐の版圖

隋は、南北を統一せしも、國威いまだ大いに揚がるに及びざりしが、唐の太宗、英資を抱き、高祖を佐けて數百年來亂麻の如き中原を定め、内はよく國政を整へ、外は威力を四境に振へり、高宗益内治の美を致せるのみならず、また大いに武を外征に揚げしかば、版圖の廣大なること、前古その比なく、威光殆ど亞細亞の大半に及び、東は日本海を究め、西は中亞を包み、南は後印度に達し、北はシベリアに及びべり。内屬の諸部八百ありて、六都護これを統べ、實に漢人種全盛の時代なりき。

對外の一般

唐太宗は、まづ東突厥を降して、威を塞外に振ひ、更に吐谷渾・吐蕃・高昌を服し、印度に結んで、高句麗を伐ち、シエエンダを滅ぼしぬ。高宗は西突厥を破り、大食と戦ひ、高麗・百濟を平げたり。かくて西はローマ・ヘルシアの通聘を受け、南は南海

印度に朝貢せしめ、東は日本と交を通じ、北は契丹・室韋・奚等に來服せしめ、その結果、支那の文化に大なる影響を及ぼしたり。

唐初對外の形勢概ねかくの如くなりければ、以後歴代に起れる外國との關係甚だ繁多なりしが、殊に安史の亂後、塞外人の入寇を招き、遂に唐室衰亡の一因となりぬ。今、節を重ね、唐代の外征・交通を叙し、并せて關係諸國の形勢を述べむ。

第二節 東方諸國

一、漢末以後の朝鮮の形勢、
二、唐と朝鮮
三、高麗、渤海

東漢より、高麗は朝鮮半島に雄視し、南北朝の初には、百濟・新羅と共に半島に鼎立し、好を後魏に通じて勢頗る盛んなりしかば、新羅は百濟と結び、百濟はまた、日本に通じて、共に

三韓の形勢

高麗に當れり。その後新羅は高句麗と結び却つて百濟を侵し、つひに日本任那府を陥れ(五)益國力を張れり。その後高句麗は、新羅の強大なるを疾みて百濟に結び、百濟は日本の保護を求めしかば、新羅は孤立して援を隋唐に乞へり。高句麗は嬰陽に至りて遼東を侵し、まづ隋の文帝と戦ひ、また再三煬帝の大軍を撃破し、遂に新羅入唐の途を絶てり。

唐と三韓

高句麗、百濟の滅亡

新羅、高麗の興亡

唐太宗、高句麗を親征して(四)克たす。高宗の世には、百濟を滅ぼせり。(六)百濟の王弟、扶餘豊は日本、高句麗の援を求めて恢復を謀りしかど、事遂に成らざりき。(六)幾程もなく高句麗亂れしかば、高宗またこれを滅ぼせり。(六)かくて高宗は安東都護府を平壤に置きて、朝鮮半島を統制したり。その後、新羅の文武王は百濟の故地を略し、一旦、唐に破られしも、唐の中世以降の内亂に乗じ、常に威を朝鮮に振ひ、遂

渤海の興亡

にほぼ、その半島を略定せり。唐末に至り、新羅の國政大いに亂れしかば、王建といふもの高句麗王と稱し、朝鮮全土を統一せり。(三)これを高麗の太祖といふ。これよりさき、ツング種族の契丹、靺鞨、新羅の北境に勢力を得るに至れり。渤海は粟末靺鞨に屬し、高句麗の北、ツングリ一江畔に住せしが、部酋大祚榮に至り、唐兵を破りて、遂に高句麗の地を略せり。唐の玄宗これを封じて渤海郡王となす。(三)その後、益地を開き、始めて使(高)を日本に通せり。(三)その境域、東は日本海に連り、西は遼河を踰え、南は新羅に接し、東はツングリ一江を究め、爾來暫らく海東に雄視せしも、五代の時、遂に契丹の太祖に滅ぼされたり。

柔然突厥の興亡

突厥の分裂

第三節 唐と西北諸國

(突厥、回紇、高昌、吐蕃、南詔)

北匈奴亡びて鮮卑代り、鮮卑衰へて柔然これに代れり。柔然曾て後魏に敗れて、その勢力衰へたれば、阿泰山の突厥(其種)は、柔然に背きて、木杆可汗に至り、遂に柔然を滅ぼしぬ。(五)これより漸く四隣を併せて強大なり。

突厥は、更に兵を西方に進め、エフダル、契丹、結骨を破りて、内外蒙古(本領)天山南北路(通商)中央亞細亞の一部(領地)を併せ、都斤山に居りてこの大版圖(東瀋州より西は、アラブ海に接す)を統べ、周、北齊を壓したりき。また屢隋の文帝と争ひしが、この時分れて東西二突厥となり、木杆可汗は東部を統べ、杭愛山附近に居り、烏桓の故地を領して、支那の西北邊に寇し、達頭可汗は西部を領して下泉(タラス河邊)に都し、東羅馬帝國(テヤスの朝)に通じてペルシアを侵せり。

唐と東突厥

東突厥の滅亡

回紇



回紇人

東西難を構ふるに及び、東突厥は援護を隋に求めしが、隋末に至り、反つて、勢力強大となり、唐の高祖の如きも、その初め臣と稱して兵を借りしかば、東突厥、唐を侮りて屢邊に寇せり、間もなくナール可汗、その族トール可汗と並び立つて

あひ争ひ、國力漸く衰へしかば、太宗は東突厥を伐つて之を滅ぼせり(六三)

回紇は後世のいはゆるウイグルにて漠北に雄視せしが、太宗の時唐に仕へ、(六四)安史の亂を平げて重賞を受け、亂後も屢援兵を貸ししかば、

高昌および西突厥の滅亡

漸く驕りて邊境に寇せしも、唐末に及び、北隣の黠戛斯に滅ぼされたり。

唐太宗すでに東突厥を滅ぼし、更に高昌國(吐蕃地方)を滅ぼし、(六四)直ちに西突厥と境を接せり。西突厥は一時國力強大なりしも、國內分離して、その勢衰へたりしかば、高宗再征して、全くこれを平定せり。

南詔は雲南地方の最強なる蠻族にて、また玄宗の時には雲南王の爵を賜はりしこともありしが、反覆常なく、國號を大理と稱し、屢唐交趾を侵せり。その後衰へてまた唐と和を通じたり。

吐蕃はチベット種にて、西羌の後なり。太宗の時今の西藏地方を領して、北は突厥に接し、南は印度に連れり。高宗これを征制すること能はず、一時和を結びしも、後また背きて、漸

唐と吐蕃

南詔

く強大となり。安史の亂に乗じて河西隴右の地を奪ひたり。(七六)これより吐蕃は、回紇高昌を誘ひ、南詔と結び、屢唐に入寇せしが、後南詔に破られて大いに衰へぬ。

第四節 唐と日本南海および南洋との交通貿易

前述の如く、廣大なる唐の版圖は、中央亞細亞より遙に南東二亞の大陸に連りしかば、諸外國との交通は甚だ頻繁となれり。今、前諸節に敘べきりし日本南海、および西洋等特殊の方面について、聊か記さむ。

一、唐と日本との交通

わが西邊の民は、すでに西漢時代より支那に交通せしも、彼我、公に交通せしは、實にわが推古帝の朝にあり。唐に及び

一、日本との交通

二、南海との交通

て修交ことに盛んとなり、學生・僧侶の留學する者甚だ多く、大いに制度・文物を輸入し、直接に儒佛の教學をも傳へたり。(鑑真などの名僧は唐よりわが國に來れり)殊に玄宗・德宗の間には、交通最も繁く、わが百物、皆かれに則りしも、宇多帝の時、菅原道眞の議によりて、遣唐使を罷めしかば、唐末以後は、ただ僧侶商賈の私に往來するものありしのみ。要するに日本王朝當時の文化は勿論、大化の新政の如きも、一に唐と交通の賜なり。

二、南海との交通

南海といふ稱呼の、明かに支那史籍に現はれたるは、南北朝の頃よりなり。されど兩者の交通は、すでに兩漢前後にその端を啓き、南北朝に至りては、頗る繁盛に赴けり。こは當時支那の佛教、盛運に向ひたれば、夙に佛教を奉ぜる南海諸國の來りて、これを弘布せんとしたるによる。よりて彼等は、盛

三、西洋との交通

んに佛像・經文を贈りて布教に盡力したり。唐に至りて太宗・高宗の時、大いに外征を試み、すでに東西北の三面を定め、更に威を南海諸國に示しかば、今の西ナヤンバ（今附近）カンボヂヤ・シナム（暹羅）ジャワ・スリボヂヤ（スマトラの一部）セイロン等皆怖れて來貢し、香料・象牙その他の産物を贈りたり。

三、西洋との交通

後漢の末より、羅馬の商船は印度を経て支那に來り、支那の商船も時に印度に航し、盛んに貿易を營みしが、佛教東漸して、支那印度の通路開くるに従ひ、支那の海運漸く興りぬ。唐初に至りては、支那の商船は南洋・セイロンに航し、更に進んでヘルシア灣に入り、セイロンを中心として交易を行へり。その後大食國興り、ヘルシア灣并に印度河以南の海港を占領するに及び、アラビヤ人の商船は、南洋を経て廣東・福建

二、南海との交通

て修交ことに盛んとなり、學生・僧侶の留學する者甚だ多く、大いに制度・文物を輸入し、直接に儒佛の教學をも傳へたり。(鑑真などの名僧は唐よりわが國に來れり) 殊に玄宗・德宗の間には、交通最も繁く、わが百物、皆かれに則りしも、宇多帝の時、菅原道眞の議によりて、遣唐使を罷めしかば、唐末以後は、ただ僧侶商賈の私に往來するものありしのみ。要するに日本王朝當時の文化は勿論、大化の新政の如きも、一に唐と交通の賜なり。

二、南海との交通

南海といふ稱呼の明かに支那史籍に現はれたるは、南北朝の頃よりなり。されど兩者の交通は、すでに兩漢前後にその端を啓き、南北朝に至りては、頗る繁盛に赴けり。こは當時支那の佛教、盛運に向ひたれば、夙に佛教を奉ぜる南海諸國の來りて、これを弘布せんとしたるによる。よりて彼等は、盛

三、西洋との交通

んに佛像經文を贈りて布教に盡力したり。唐に至りて太宗・高宗の時、大いに外征を試み、すでに東西北の三面を定め、更に威を南海諸國に示ししかば、(今の西貢附近) ナヤンパ・シナム(暹羅)・ジャワ・スリボジャ(スマトラの一部)・セイロン等皆怖れて來貢し、香料・象牙その他の産物を贈りたり。

三、西洋との交通

後漢の末より、羅馬の商船は印度を経て支那に來り、支那の商船も時に印度に航し、盛んに貿易を營みしが、佛教東漸して、支那印度の通路開くるに従ひ、支那の海運漸く興りぬ。唐初に至りては、支那の商船は南洋・セイロンに航し、更に進んでヘルシア灣に入り、セイロンを中心として交易を行へり。その後大食國興り、ヘルシア灣并に印度河以南の海港を占領するに及び、アラビヤ人の商船は、南洋を経て廣東・福建

外交と諸宗教の傳播

浙江の諸港に貿易するもの甚だ多かりき。かくの如くアラビヤ人は、遂に漢人に代りて、印度洋の航海權を掌握せしのみならず、陸路の通商をも擴張して、當時優に世界の商權を獨占したりき。かく海陸兩面において、西洋との交通繁盛を致したる支那も、唐以後は國內の争亂甚しく、またアラビヤ人の勢力も衰へしかば、終に交通も衰へ果てぬ。

唐代外交の大勢、すでに本章略述の如くなりしかば、諸國に行はれたる諸宗教も、あひ前後して唐に傳播し來りぬ。詳しくは章を更へて述べむ。

第十八課 印度・度・ベルシアおよび大食の盛衰

印度は、大月氏の勢衰へてより、エフタルに領せられしが、

印度

戒日王

梁の時ウヂャーナ國(北印)にヴィクラマーヂナヤ(戒日王)出で、嚙嗟を逐ひ三印度に君臨して、大いに文學・佛教を興せり。その後シラーヂナヤ(戒日王)の時も、國威を全土に振ひ、また大いに教學を興ししかば、學者・高僧多く輩出せり。唐の太宗吐蕃を征服するに及び、始めて好を唐に求めたれば、(六四)太宗も、また王立策をしてその國に使せしむ。(六四)時にシラーヂナヤ死し、權臣アラナシヨシ自立して、唐使を拒めり。立策よりにて吐蕃ネパールの兵を募り、伐ちてこれを擒にせしより、(六四)印度の諸侯大いに恐れ、あひ前後して唐に朝貢せり。爾來印度は分裂して、互に攻争を事とせし間に、ラヂャプト種族西印度に起り、波羅門教徒の樹てたるヒンド教を崇拜し、遂に印度西半の主權を握りたり。かくてヒンド教は佛教を排して、國教となりしが、大食(大食)の侵入するに及びて、モハメツ

ラヂャプト族

ペルシアの興亡

ド教も盛んに印度に入りぬ。

東漢の末、バルチヤ帝國(安息)の衰微に乗じ、ペルシア人アルタクセルクセスこれを滅ぼしてペルシア國を再建し、(三三)國勢漸く振ひぬ、爾來百五十餘年間、或はローマを侵し、大月氏を破り、霸を葱嶺以西に稱せしが、その後エフダルに屈し、



摩河末の像

ローマ・西突厥に犯され次いで、大食の侵寇を蒙るに及び、救を唐の太宗に求めしも、救はれずして亡び、遂に國王は逃れて唐に降り、(六四)

唐の初めモハメツ

大食國

モハメツドと回教

ド、アラビアに出で、回教を創唱し、(六)兵力を以って布教を圖り、その結果遂にアラビア全土を統一して、いはゆる大食國(後ササニヤ)を建設せしが、その死後(六三)教嗣皆よく遺意を體し、兵力によりて新教を世界に布かむとし、ハリファ、オスマンの時、羅馬に迫り、エシプト・シリアを壓し、遂にペルシアを滅ぼし、好を唐に通ぜり、爾來海路を経て支那の南方に航し、通商貿易を營むもの次第に増加し、中宗の世には(七〇)廣州(廣東)泉州(福建)等に來住せる商賈およそ一萬以上にも及べりといふ。

儒學

第十九課 漢唐の學藝・宗教

秦の時、書を焚き、儒を坑にしたれば、儒學は、一時跡を世に

文學

絶ちしも、漢の惠帝に至り、挾書の禁を解き、武帝また董仲舒の説に従ひ、百科の學を斥けて、儒學を宗とし、古書を求めてこれを振興せしかば、俄に隆盛を極めたり。これより名儒輩出し、前漢には、董仲舒・賈誼・孔安國、公孫弘・楊雄の徒あり。後漢には、馬融・鄭玄の諸子あり。特に鄭玄(東漢末)は儒學に博通して、能く兩漢の儒學を大成したり。されど、皆訓詁の學にて、敢て新説を唱ふるものなかりき。三國の時、魏に王肅・王弼・何晏など出でしも、魏晉の時、老佛の學行はれ、儒學も、その影響を被りて、大いに衰へたり。儒學また南(王)北(鄭)二派に分れ、隋の時には、なほあひ對して唐に至れり。太宗學術を好み、南北の儒學を統一して、その隆盛漢代を凌ぎしが、孔穎達・顏師古等に命じ、五經正義を作らしめしより、遂に流れて註疏の學となりぬ。安史の亂後、儒學は漸く衰へ、その後、韓愈ただ一人盛ん

詩文

にこれを發揮して、老佛を斥けしことあるのみ。

文藝も、前漢に至りて興起し、爾來文豪續々輩出せり。即ち前漢には、賈誼・司馬遷・司馬相如・楊雄ありて、論策・史筆・辭賦は、皆後世の宗となる。後漢には、班固あり。三國の世には、曹操・曹丕・曹植皆詩を以て鳴る。晉より南北朝に亘りて、陳壽・謝靈運・梁武帝・沈約・范曄など出でて、詩文に名を競ひたれど、殊に陶淵明を推して第一とす。後漢以後の文藝は、次第に浮華に傾き、南北朝に及んで極れり。唐に至り文學の隆盛なること、前古殆どその比を見ず。詩には、李白・杜甫ありて、詩風を一變せり。文には、韓愈・柳宗元出で、いづれも力を古文に用ひ、六朝の弊風を一洗し、四六駢儷の文體を打破したり。この外、張說・蘇頲・元稹・白居易などありて、名を詩文に擅にせり。かくて唐は後世に詩文の典型を垂れたり。

美術

東漢以後佛教の影響を受けて、建築・工藝・書畫等大いに發達し、東晋の王羲之は、書の精妙を極め、その名最も著明なり。唐代には褚遂良・顔真卿最も書を能くし、李思訓・吳道玄は山水畫に巧みなりき。その他工藝・美術も頗る發達せり。また武宗の朝、印刷の發明ありしは、實に文化に大關係あることなり。(これより先き蔡漢に紙筆發明ありき)

宗教

漢の時代には、道教・佛教のみなりしが、唐に至りては、外國交通の結果として、景教・祆教等幾多の外教傳來し、宗教の盛觀を呈したり。

(一)佛教は、後漢以來年を経て次第に傳播し、晋時代には甚だ隆盛に赴きたり。爾來佛圖澄・衛道安・鳩摩羅什など、印度西域の佛僧、支那に來たるに及びて、一層の勢力を添へぬ。東晋の末、長安の僧法顯は、印度に入り、セーロンを経て、南洋より還

れり。南北朝の際には、兩朝の君主概ね佛を信奉したり。特に梁武帝の深くこれに歸依せるに當り、印度の達磨來りて禪學を傳へぬ。當時また支那より印度に入り、僧侶の法を求むるもの少なからざりき。唐に至りては、佛教益旺盛を極めたり。太宗の時、僧玄奘印度に入り、十七年をへて歸り、數百の經論を持來し、また高宗の世には、義淨印度に遊ぶこと二十五年にて、また多くの佛典を得たり。善无畏・金剛智・不空などは、印度より唐に來りぬ。かくて佛教の面目一新し、數派に分れて盛んに行はれ、遂に、東邦諸國にも影響したり。

(二)道教は、もと老莊に附會して作られ、遂に老子を教祖としぬ。秦皇漢武以下、神仙の説を信するもの多く、張角の如きは、三國の際これによりて愚民を惑したり。晋代には老子の學盛んになると共に、道教も大いに流行せり。殊に唐の高宗は、老

子に、太上玄元皇帝の尊號を上りて國教となしぬ。而して武宗の排佛ありてより、益勢力を振興し、常に佛教とあひ反目したりき。

(三)景教はネストリウスの開きしものにて、基督教の一派なり、夙にペルシア地方に行はれ、南北朝の際、支那に傳はりしが、唐太宗の時、オロゴン經典を携へて長安に入り、以後大いに流行せり。またペルシアのゾロアスタル教も、支那に傳はる、即ち祆教にて、ペルシアの拜火教なり。その外ペルシアのマシ教、アラビアの回教、(モハメ)および西藏(チベット)の喇嘛教等も一度傳來せしが、武宗、道教に耽りて佛を排したれば、景教以下概ね廢せられぬ。

附節 儒佛の東流

漸佛の東

秦王苻堅の江北に雄視せし時、高句麗を降して、佛教を傳へ、(三三)高句麗、またこれを新羅に傳へたり。東晋の孝武も次いで佛教を百濟に送りしかば、佛教は遍く三韓に流布せり。かくて司馬達など、まづこれをわが日本に傳へ、(五三)欽明天皇の朝に及び、百濟の聖明王は三寶を獻せり。(五五)これより佛教漸くわが國に行はるるに至れり。而して佛教の東漸につれ、儒教も、また東流したり。蓋し漢武東征の結果は、その武威と共に文教を朝鮮に及ぼし、神功皇后の征韓は、更に儒學をわが國に傳へぬ。要するに、日本民族の機運精神いづれにも大關係を有する儒佛二教は、實に朝鮮半島の媒介によりて東漸傳來せしものといふべし。

流儒の東

第三篇 近古史

第一課 五代の世 契丹

後梁と後唐

梁王朱全忠は、唐室を奪ひて、みづから帝位に登り、汴(大梁と河南)に都せり。これを後梁太祖といふ。(七九〇)時に前朝の節度使など各地に自立して王と稱し、互にあひ對峙せしかど、その多くは、あひ次いで後梁に服せり。獨り晋王李克用のみ、屢梁と兵を交へ、子存勗(勗)嗣ぎ、大いに太祖を破れり。末帝の時に及びて、李存勗遂にこれを滅ぼし、洛陽に即位す。後唐の莊宗これなり。(九三)莊宗は一時勢威を振ひしも、晩年漸く政に倦み、李嗣源遂に位を奪ふ。(九三)これを明宗といふ。帝の治世は、頗る平安なりしも、國力また振はず。李從珂の時遂に契丹と石敬瑭とに滅されたり。(九三)

晋 契丹と後

後漢と後周

契丹は東胡の後(トベツ)にて、南北朝の時より始めて顯はれ、潢河(内蒙古の東部)附近に居りて、屢唐に入寇し、漸次強大となりぬ。後梁の初、耶律阿保機出で、みづから皇帝と稱せり。(九一)これを契丹太祖といふ。太祖四方を征服して、蒙古滿洲一帶の地を領せり。太宗の時、後唐の節度使、石敬瑭反して兵を契丹に乞ひしかば、太宗これを援けて後唐を滅ぼし、敬瑭を大梁に即位せしめたり。これを後梁の高祖といふ。よりにて高祖契丹に臣事せり。出帝立ちて、臣禮を執らざりしかば、太宗怒りてこれを討滅し、(九四)みづから汴に據りて、國號を遼と改めしが、士民の服せざりしにより、翌年北へ歸る途上にて死せり。遼(契丹)の太宗汴を去るや、後晋の節度使劉知遠、帝と稱して汴に都せり。(九四)これを後漢高祖といふ。その子隱帝に及び功臣郭威を殺さむとして、却つて弑せられき。郭威遂に將士

に推れて帝位に登れり。(九五)これを後周の太祖とす。隱帝の叔父劉崇は、太原に據りて北漢を建て、援を遼に求めて恢復を圖り、屢、後周と戦へり。後周の世宗、雄略ありて海内を統一せむとせしかども、中途にて崩じぬ。(九五)恭帝立ちて、趙匡胤に命じ、遼、漢の入寇を拒がしむ。然るに匡胤は、將士の心を得たりしかば、遂に擁せられて帝位に即く、これを宋太祖といふ。後梁よりここに至るまで五姓、凡そ五十三年なりき。之を五代といふ。

第二課 宋の初世 宋・遼・西夏の關係

宋太祖は深く唐以來、衰亂の原因を察し、宰相趙普と謀りまづ武人の、節度使を廢し、新に文臣を任用して、その州郡を

宋太祖の革新

統一の大業



宋太祖の像

朝廷に直隸せしめ、通判を設けて郡守の專横を防ぎ、轉運使を置きて、財賦を掌らしむ。また兵制を改め、驍勇を選びて禁旅となし、禁旅を派遣して、邊の戍兵に充て、更にその數を増して、地方の兵數と均しからしめたり。かくて悉く財政・兵馬の權を朝廷に收め、藩鎮の跋扈と將士の專横とを止め、多年の積弊を一洗したり。

太祖すでに内政を改革し、曹彬、潘美などを遣はして、諸國を滅ぼせり。これ皆五代以來、各地に割據せし獨立國なりき。太祖更に北漢を伐たむとし、果

宋遼の和戦

さずして崩す。(六九七)太宗その後を承け、遂に北漢を滅ぼし、五代十國の亂を鎮め、始めて一統の業を果しぬ。(九七)
宋太祖の時は、遼と親和せしも、太宗統一の勢に乗じて遼を侵し、全くその平和を破れり。時に遼の景宗位にあり、耶律休哥をして宋軍を逆へ撃たしめ、大いにこれを破り、爾來屢宋軍を撃退せり。太宗志を得ずして崩じ、(七九八)眞宗の繼ぐや、遼の聖宗大軍を擧げて南侵せり。眞宗これを防ぎ、一旦敵を却けしも、宋は連年の征戰に疲れ、つひに和を講じ、銀十萬兩、絹二十萬匹の歲幣を納るることを約せり。(四〇〇)

遼の極盛

遼は、聖宗(九八)の時、全盛を極め、その領土、西は、天山に及び、南は支那の北部を兼ね、北は蒙古全部を併せ、東は海に及びたり。されど、聖宗崩じて(一〇三)よりは國勢漸く傾けり。
西夏の祖は、タングートの後にて、チベット種に屬し、その

西夏興る

宋・遼・西夏の媾和

祖を拓跋思恭といふ、思恭曾て功を唐に立て、李姓を賜はり、夏國公に封ぜられたり。これより世々夏州に居りて、宋遼に臣服せしが、元昊(一〇四)に至り、悉く河西の地を略し、大夏皇帝と稱せり。(一〇三)時に、宋は遼との争によりて、國力疲弊せしかば、元昊頻に宋の西邊に入寇するも如何ともすること能はざりき。

仁宗の治世

宋の仁宗は西夏を防ぎしも、遼の南侵に敵せずして、已むなく和を議し、歲幣を増して事平らぎぬ。(一〇四)西夏も漸く攻戰に倦み、宋の歲幣(銀帛二十)と封冊(夏國)とを受けて和を結びぬ。かくて、三國は一旦全く事無きを得たり。
仁宗は、人君の徳量を備へ、外に向ひては勢甚だ振はざりしも、韓琦・范仲淹・富弼・歐陽修などの諸名臣朝に立ちしかば、内治宜しきを得て國內平安なりき。然れども廢后の事によ

りて、朝臣二分し、奸人あひ結んで名臣を排斥せしかば、これより正邪黨争の端を開き、遂にいはゆる朋黨の難を招くに至れり。

第三課 神宗の新法 兩黨の軋轢

宋は前代の弊を矯めて武力を抑へたりしかば、太宗より英宗にいたるまで、常に西夏の屈辱を蒙り、従ひて、國力も甚だ疲弊せり。神宗位に即き、(七年〇六)王安石を拔擢して、専ら富國強兵の策を講ぜしめ、年來の國辱を雪がんとせり。王安石は博學にて識見あり、全く舊法を改めて、盛んに新法を行へり。中にも、青苗募役、市易法(法)、保甲保馬法(法)の五者は、最もその主要なるものたり。富弼、歐陽修、司馬光、文彦博、程顥、蘇

王安石と
新法

神宗の晩
年

軋シなどは、皆力を極めてこれを非難したり、されど安石は悉く反對者を斥け、韓修、呂惠卿などを引き、一意新法を斷行せり。神宗は、また大いに外征を企てしが、まづユーナ(交)を伐ちて功なく、西夏と戦ひて敗れ、北邊は遼に奪はれ、内外の事、一も意の如くならずして已みぬ。

王安石、一たび新法を發してより、おのづから二派(元祐黨)を生じ、久しくあひ争ふに至れり。神宗は外征に敗れ、内争を招きて崩じ、哲宗立ち、(六年〇八)大皇太后高氏、政を攝し、司馬光などを擧げて、安石の黨を斥け、悉く新法を罷めたり。次いで安石と同年に司馬光も死し、その徒四裂してあひ争ひしが、哲宗、政をみづからするに及び、また新法を復興せり。(三年〇九)後また徽宗立ちて、皇太后政を攝し、(二年一〇)韓忠彦などを用ひて新法派を斥けしも、徽宗いよいよ政を執るに及び、また悉

熙豐・元
祐の黨争

宋の衰政

く守舊派を斥けたり。これより新法派朝に充ちて榮花を極め、爾來二十餘年の久しき、國政を專にし、宋室益衰微せり。

第四課 宋・金・遼の興廢

遼の衰運

宋の衰ふるにつれて、遼もまた衰運に向へり。興宗の世は、國內やや平安なりしが、道宗に至りて(一〇五)佛教に耽り文學を好み、士風の柔弱を來たし、且つ陪臣權を弄し、政令次第に亂れて諸部屬の心を失へり。天祚帝繼ぎて、(宋同時)無道なりしかば、衰運いよいよ回へすべからざるに至れり。會、その背後に金人起り、遂に遼は滅ぼされぬ。(一一三)

金の興起

金は即ち女眞にて、東胡種(ツンダ族)に屬す。もと黒龍江上にありて靺鞨(ムカハク)といへり。遼の盛んなる時、その一部(四)は遼に臣伏

金宋の聯合

して、熟女眞といひ、他の一部(北東)は、ただその保護を受けて、生女眞といふ。生女眞に完顔部(ウヰヤン)あり、勢殊に盛なりしが、アクダその酋となるに及び、(三)斷然遼と絶ち、天祚帝の政衰へたるに乗じて、屢遼兵を破り、遂に國を金と號して、皇帝と稱せり。(五)これ金太祖なり。次いで太祖熟女眞を降し、更に遼に迫れり。

是よりさき、宋の徽宗は、金と合して、遼を圖らむとして、狹攻のことを議せり。(一)金は北より遼の中京(定大)を攻め、宋は同時(二)にその南京(建)を撃ち、事成らば、曾て石晋の遼に割きたる地は、宋これを復し、金は自餘の地を收め、(三)宋は遼に納れし歳幣を、金に贈ることを約したり。

遼の滅亡

かくて金太祖は、遼の上京(遼)中京を取り、天祚帝を追撃して、西京(太)を陥れたり。されど宋は南京を攻めて抜く事能は

西遼の建國

ざりしかば、太祖は、直に進みてこれを略せり。よりにて宋の怠敗を責め、前約を棄てて、僅に燕京附近六州の地を宋に與へ、且つ歳幣を増さしめたり。(二年三)遼の天祚帝は走りて、西夏に依らむとせしに、西夏は却つて金に通じ、帝は途に捕へられて、遼亡びたり。(五年三)されど、その一族耶律大石は、西に走りて中央亞細亞に入り、西遼國を建てぬ。

第五課 宋・金の交戦

宋金の戦争

金の太宗位を嗣ぎ、(二年)勝に乗じて、南を侵さんとせしが、遂に名を設けて宋を伐ち、燕京(遼)を陥れ、長驅して汴京に迫る。宋徽宗大いに恐れ、位を欽宗に禪りて、金に謝し、金主を尊びて伯父と稱し、土地・金帛人質を納れて和を請へり。然るに

第一回の媾和

宋は、その約を履まさりければ、翌年金軍再び汴京を陥れ、徽宗・欽宗以下を捕へて北に還れり。(七年三)これより、河北の地、全く金の有に歸しぬ。

宋の南遷

金軍北歸するに及び、欽宗の弟、高宗位につき金の銳鋒を避けて、揚州(蘇)に遷れり。(七年三)金また揚州に迫りしかば、高宗は、更に杭州に遁れ、金兵なほ追撃せしも、太宗の病急なりしにより北歸せしかば、高宗、つひに都を臨安(杭州新)に定めたり。(五年三)金は、益諸州を略せしが、宋の韓世忠・岳飛・張浚など忠勇の名將、苦戦してよくこれを防ぎたり。これより以後を南宋といふ。

秦檜の和議

金の熙宗立ち、(五年三)内争起るに乗じ、宋軍連りに北方の地を恢復せしが、高宗は、秦檜の言に従ひて金と媾和せり。幾程もなく、金軍また南侵せしかば、宋の諸將奮撃して、大いに

第二回の
講和



岳飛の墳墓

これを破り、まさに河北を回復せむとせしに、秦檜は、尙和議を主張して、諸將を召還し、岳飛を殺して、韓世忠などを斥け、(一)西は大散關(嶺西)東は淮水を以て二國の境界とし、(二)宋より銀二十五萬兩、絹二十五萬匹の歳貢を金に納れ、(三)宋帝は、金の封冊を受け、(四)金は徽宗の梓宮と、章太后を宋に還すべきことを約したり。
(二年一四)これより、秦檜の專恣益甚しかりき。

金の熙宗弑せられ世宗立ち、専ら意を内治に傾け、また和

第三回の
和議

南北の
小康

第四回の
講和

宋金の衰
微

を宋に求めたり。宋は高宗の後、孝宗立ち、(三年一六)大度・英明の資ありて、連りに北方の回復を企てしも、成らざりしかば、遂に金と和し、歳貢の金帛各五萬を減じ、君臣の關係をやめて、叔姪と稱することを約したり。(五年一六)かくて、兩國各内治を圖りて、殆ど四十年間、南北共に平和を保ち、やや戦亂の餘弊を脱することを得たり。

金は世宗の後、章宗繼ぎ、國威漸く衰へぬ。宋は、孝宗より、寧宗に至り、韓侂胄、威權を弄し、金を伐ち、却つて大敗し、金章宗の怒に觸れて、寧宗遂に侂胄を斬りて、金に謝し、歳貢を増して和を乞ひ、兩國の關係を伯姪に改むるに至れり。(八年二〇)これより金は、益政を怠り、宋朝も次第に衰ふるに當り、蒙古北方より興起して、兩國を併合し、遂に東洋の風雲を一變せり。

一、儒學

第六課 宋代の儒學 文藝および宗教

漢唐の儒學は、いはゆる訓詁の學にて漸くその弊に陥り



胡瑗の像



程頤の像



程顥の像



朱子の像

しが、宋に至り、學風一變して、義理の學を生じたり。こはもとより、幾多の源因ある事なれど、訓詁の反動、佛教の刺戟、および、太祖以降、歴代獎學の方針等、その主因なりき。周惇頤(の仁宗)、(の仁宗) まづ宋學性理の氣運を啓き、ついで程顥(の神宗)、程頤(の神宗)、益(の神宗)、その學を發展し、張載、邵雍も、また二程と唱和して、斯學を進めしが、南宋に至り、大儒朱熹出でて、宋學を大成し、支那近世哲學の新運を開きたり。同時に陸九淵ありて、徳性説を唱へ、朱子とあひ對峙し、陳亮の一派は、功利の學を説きて、また頗る人心を動かせり。かくて宋は、支那思想界の發達の頂點に達しき。

二、文藝

文藝は、唐末より漸く衰へ、ことに、宋初の文は、なほ駢儷の餘習を脱すること能はざりき。歐陽修まづ出でて(の仁宗)、古文を鼓吹するに及び、蘇詢、蘇軾、蘇轍、王安石、曾鞏の文豪輩出して、文弊を一洗し、大いに異彩を發揮せり。(此の六子と唐の韓柳を加へて、唐宋八大家といふ)

詩にても、歐陽修・蘇轍・梅堯臣・黃庭堅の詩伯出でて詩風を新にせしかば、燦然たる詞藻、唐に次いで見るべきもの多し。南宋以後は理學に壓せられて、詩文何れも振はざりしが、なほ文には、王十朋・葉適・范成大・陸游ありき。特に李綱・朱熹・文天祥・謝枋得などの忠烈・慷慨なる詞藻に至りては、頗る人を動かしぬ。史筆には、有益なる司馬光の資治通鑑、馬貴由の文獻通考ありき。而して、金には元好問の徒、ひとり文名を擅にし、遼の文壇に至ては、更に稱すべきものなかりき。

三、美術

宋には、書畫の技大いに發達して、名家多し。特に、書畫に精妙なる徽宋の獎勵により一層旺盛となり、李公麟・米芾等は、畫を以て鳴り、太宋帝・蔡襄・蘇軾、また米芾等は、最も書に名ありき。また唐末には、すでに印刷術も發明せられたりといふ。佛教は、五代の時一旦衰へしも宋に至りて、また盛んに行

四、佛教

宋と日本との交通

はれき。特に禪宗最も盛んにて、名僧慧理・慧龍少なからざりき。されば、二程以下の學者、また佛を學ばざるものなかりしかば、(朱子を除外)佛の儒學に影響せしこと、もとより偶然ならざるなり。道教も、眞宗・徽宗の勸奨によりて、その勢一時は佛教を凌ぐに至りしも、南宗以後は、兩教いづれも衰へたり。當時、わが日本は、高麗・遼・金および宋等と、互に通商交通を行ひたりしが、南宋の際、日宋貿易の機運大に進み、榮西・道隆などの僧侶、宋に遊學するもの常に絶えずして、日本の禪學、これより漸く盛大となりぬ。

第七課 宋代の高麗と中央亞細亞

第一節 高麗の形勢

高麗と宋

高麗の太祖、五代の時既に朝鮮半島を統一して、(六九三)後晉に通じ、光宗は更に遼太祖の封冊を受けたり。その後、成宗立ち、前朝の弊政を改め、宋に則りて、制度を定め、佛教を信じ、文學を奨め、よく中興の運を開きたり。然るに、遼の聖宗は、その宋に通ずるを怒りて、これを伐ちしが、宋の太宗、救に應ぜざりしかば、成宗遂に遼に降り、すでにして、康兆、廢立を行ひ、宋に結んで遼と戦ひ、敗れてまた降りぬ。(九一〇)その後、睿宗大いに女眞を破りしも、やがて和を結びしが、金の太祖起り、遼を滅ぼし、宋を破るに及び、仁宗は、金に臣伏して、その封冊を仰ぎたり。その後、高麗の内亂あひ繼ぎて、国力終に衰へ、元の金を滅ぼすや、更にその外藩となりぬ。

第二節 中央亞細亞の興亡

阿拉比亞人とトルコ人の盛衰

一、サマ

ニ、カズ

三、セルヂク

大食國は、教嗣アルマンソルの時、すでにバグダットに都して、中亞を略定せしが、マムン以降、國勢漸く傾き、豪族所在に自立して、サルタン(主君)と稱せり。ペルシアのサマン家は、この際起りて、殆ど中亞の全部を占略せしも、(四八七)やがてまた、勢を失ひしかば、その奴隸なるトルコの一種族(突厥)カズニに起りて、攻略を行ひしが、サルタン、マームードに至り、益境土を拓き、遂にサマンを併吞せり。カズニ王家、即ちこれなり。更に進んで全印度を征服せしも、その死後、國運全く衰へぬ。時にトルコ族のセルヂクは、バハラに據り、カズニを破り、バグダットを侵して、その權を奪ひ、都をニシャブルに定め、(三七〇)その後、勢甚だ強大なりしも、メリクシヤの死後(二〇九)より、トルコ人の威力、漸く衰へたり。

西遼の興

遼の宗室、耶律大石は、中亞に走り、ウイグル(註四)を破り、セルヂユクを略定して中亞を併せ、西遼を建て、クスオルトに都す。(註五)西遼の徳宗これなり。その孫チヌルクに及んで、チヌルクのクナユルクに滅ぼさる。(註六)これよりさき、ホラズム、ホテズム(註七)は、裏海の東に起り、セルヂユク、ペルシアを併せしが、この時、更に西遼の地を分ちて、勢強大となり、遂にアフガン(註八)を滅ぼし、(註九)サマルカンドに都して、四隣を震伏せしめたり。次いで、トルコの一種族は、また印度を略して、デリーに奴隸朝を立てぬ。

第八課 蒙古の興起 (太祖の西征)

蒙古は、蒙古種に屬し、その祖をブタンチャールといひ、オ

原蒙古の起

鐵木眞の崛起

成吉思汗の南侵

太祖の西征

西遼亡ぶ

一ノン・ケルレン二水(註一)の間に住せし游牧の民なり。當時幾多の部落に分かれ、何れも、久しく遼金に屬せしが、エスカイの子鐵木眞、英略大志あり。母弟僅に六人と衰殘の部落より崛起し、遠近を征服して、殆ど内外蒙古の地を統一し、終に大汗の位に登る。(註二)これ成吉思汗にて、即ち元の太祖なり。かくて、太祖は、更に南下して西夏を破り、(註三)勢に乗じて金を伐つ。時に金は、國亂れて拒ぐこと能はず、遂に和を乞ふ。(註四)太祖一旦これを許ししも、翌年再びこれを討ちて、悉く河北の地を併略したり。

これよりさき、ナイマンは、太祖に滅ぼされ、クナユルク西遼によりしが、その國勢の振はざるを見て、ホラズムと結び、遂に西遼を滅ぼし、(註五)更に四隣を略して強大となり。遼の回復を圖る。よりにて、太祖直ちにこれを滅ぼし、西遼の故地

を取りて、ホラズムと國境を接するに至れり。(一〇二二)

この時、ホラズムは、中央亞細亞を領して、勢威頗る盛大なりしが、モハメツド王、蒙古の商人を殺戮するや、太祖は、その四子と大舉して西征せり。(一〇二二)モハメツドは、蒙古の兵氣に懼れ、サマルカンドを捨て、裏海中の一小島に遁れて、ここに死せり。モハメツドの子ヂエラルウツヂンは敗れて、印度に走りぬ。成吉斯汗は、かくて、全くホラズムを征定して、軍を返せり。(一〇二二)また曾て、モハメツドを追うて、裏海に至り、更にコーカサス山を踰えて、ロシアの地に入り、諸侯の軍をアツフ海邊に撃破したる速不台哲伯の二將も、また成吉斯汗と、同年に東歸せり。かくて蒙古領域は、中亞の全部を兼ねて、遙に東歐を震懾せしめぬ。

ホラズムの滅亡

ロシア國侵入

第九課 蒙古の興隆 (太宗の南伐、拔都の西略)

西夏の滅亡

成吉斯汗、西征より還り、更に西夏を滅ぼし、(一一二二)次いで金を伐たむとして途に歿す。その第三子オゴタイ推されて位を承け、始めて都をカラコルムに定む。(一一二二)これを太宗といふ。太宗、父の志を継ぎ、道を分つて金を伐てり。

金の滅亡

當時金の哀宗(宣宗の子)蒙古を防ぐこと能はず。援を宋に求む。時に宋の理宗、すでに蒙古と好を通せしかば、却つてこれを南北より挟み攻めて、遂に金を滅ぼしたり。(一一二二)宋は、金の滅亡に乗じ、江北を復せむとし、汴京・洛陽を略して、蒙古の成兵を逐ひしかば、太宗怒りて、連りに宋を破りたり。

バツの西征

金亡びて後數年、高麗も降り、(一二二四)東北の經略ほぼ終りたれば、太宗、更にロシアの遠征を企て、その姪バツを將とし

クリルタイ
の西征

て、西征せしめき。(一三三三) バツ勇略あり、沿道の諸部を降して、直ちに東北ロシアの地に入り、向ふ所敵なく、全くこの地方を征服せり。バツ進んで、歐洲の全土を蹂躪せむとし、その將ハイヅククンに一軍を授けて、ポーランドに入らしめ、みづからホンガリーに進みぬ。濶端等、連戦連勝の勢にて、獨逸に迫り、北歐の連合軍とリーグニッツに血戦して、大いにこれを破れり。(一三三四) バツもホンガリーのペスト府を陥れ、オーストリアを侵し、その勢全歐を震動せしも、會、太宗の訃音に接し、みづからは留りて、悉く諸軍を還せり。(一三三四年) バツは、キプチャック國を建てて、サライに都し、ロシアを支配せり。(一三三四年) 太宗死し、その長子定宗立ち、次いでその四子憲宗立つ。太宗の一族はシラマン(太宗)を立てむとて成らず、遂に不穩の形勢ありしかば、その謀主を殺し、バツなどの封を邊地に

プラーグ
の西征

移したり。元來蒙古の相續法は、クリルタイ大會の決議によるものなれば、大帝國も、漸く分裂せむとするに至れり。

第十課 蒙古の興隆 (憲宗の南伐、プラーグの西征)

當時西方亞細亞の形勢、漸く平ならざりしかば、憲宗は、弟プラーグを遣して、これを伐たしむ。(一三三五) プラーグ進みて、バグダッドを陥れ、(一三三五) 全く大食國を滅ぼし、更に西して、エジプトに入らむとせしが、憲宗の計に接して、軍をかへし、プラーグのみは、更にアルメニヤを略して、西亞の地にイル汗國を建てぬ。

忽必烈

これよりさき、憲宗は、弟忽必烈をして、漢南を總括せしめ、更に南方を經略せしむ。(一三三五年) 忽必烈は、まづ大理國を降し、

世祖國號を建つ

吐蕃を服し、(一〇四〇年)更にウリヤンガタイを遣して、交趾(當時安南)を征せしむ。かくて西南全く平ぐ。(一一二五)よりて憲宗みづから兵を率ゐ、忽必烈ウリヤンガタイと、三道より宋を伐ちしが、果さずして歿せしかば、(一二〇五年)忽必烈、一旦宋と和して還れり。



忽必烈の像

忽必烈北歸し、諸將に勧められて開平(遼東)にて大汗の位に登り。(一二〇六年)都を燕京に定め、國號を建てて元と稱す。世祖これなり。(一二〇六年)されど太宗、定宗の一族は、忽必烈の

宋の末路

即位に不満を抱き、敢て臣禮を執らざりき。

勤王の臣

宋の賈似道は媾和を秘して奏せず、よりて恩寵を被りしかば、益權を弄して、驕横甚しく、世祖が先約を徵するに及び、却つて、その使者を拘ふ。世祖怒りて、大舉南侵し、宋を降しぬ。恭帝立ち、賈似道をして元軍を拒がしめしも、功なく、元將伯顔、史天澤等連勝連勝して東下せり。よりて似道をやめ、文天祥等をして、王事に勤めしめしも、防ぐ事能はず、遂に降れり。(一二二七年)かくて、勤王の遺臣、南方に走りて、端宗を福州に立て、次いで廣州に逃れ崖山(廣東)に據りて、帝昺を擁し回復を圖りしも、元兵水陸ならび逼り、宋軍皆利なく、文天祥は捕へられ、張世傑は斃れ、陸秀夫は帝昺を懷きて海に沈み、宋遂に滅びぬ。(一二二七年)かくて元世宗、全く支那の中原を統一せり。

第十一課 元初の内治・外交

第一節 世祖の内治

官制

元は、北方蒙古の未開なる部落より崛起せしかば、國初以來諸事悉く質素にて、もとより文物・制度の見るべきものなし。曾て那律・楚材、太祖・太宗に仕へ、朝制を創めしも、布き行ふに至らずして已みぬ。世祖に至り支那の制度を參酌し、始めて官制を定めたり。まづ中央政府には、中書省(行政を司す)・樞密院(兵部を司す)・御史臺(監察を司す)等を置き、地方には、行中書省・行樞密院・元帥府等を置き、これらの長官には、必ず蒙古人を雇ひ、次官以下には、漢人・伊太利人などの他族を併用したり。その他學制・税法等一般の諸制度は、概ね支那の前制により、また喇嘛・基督回々等の諸宗教を自由ならしめたり。

諸制度宗
教
世祖の外
征

太祖以下元の諸大汗は、皆英武にて外征を事とし、遂に歐

亞二洲に跨る大帝國を建せしが、世祖すでに宋を滅ぼして中原を一統せし後、更に兵を東南に用ひて元代極盛の域に達したり。今これを節を分ちて略敘せむ。

第二節 世祖の東征 (高麗と日本)

元の太祖曾て高麗を助けて、契丹を撃退せしが、太宗の時、高麗王高宗、元の意に逆ひしかば、太宗これを破りて、全く高麗を左右せしも、その反服常なく、世祖に至り、再び征服せられて、全く元の外藩となりぬ。

元と日本

世祖位に登るに及びて、高麗王を介して、日本を招致せむと欲し、屢書を送りて、來聘を促せり、鎌倉の執權北條時宗、その無禮を怒りて、皆これを斥けたり。よりて世祖は、日本を伐



蒙 古 の 古 船 艦

ち九州の沿岸に寇せしが、暴風雨に逢ひて、空しく敗れて還りぬ。(龜山天皇文永十一年西紀一二七四年)世祖はなほ屈せず、まづ高麗王にその女を嫁して、おのれの心腹となし、更に使を遣して日本に諭さしめしに、時宗、またこれを鎌倉に斬りしかば、世祖の激怒益甚しく、當時宋を滅ぼせる餘勢に乗じて大軍を發し、高麗の兵を合せ來寇し、まづ大宰府を犯ししが、わ

元寇敗る

が軍よく防ぎて上陸せしめず、會颶風俄に起り、元艦殆ど全く覆没したり。(後宇多天皇弘安四年西紀一二八一年)世祖大いに憤慨せしも、時に本國南方との交渉急なりしかば、遂に再舉を圖る暇なかりき。

第三節 元の南方經略 (ビルマ・コーチシナ)

元と緬國

憲宗の時、雲南を略して、ビルマと境を接せり。ビルマは、この時、すでに近傍を併せ、勢を恃んで元の招きを拒みしかば、世祖兵を發してこれを伐ち、緬軍遂に敗れ、歲貢を約して降れり。(三ニハ)シナム・アッサムも次いで元に入貢せり。

元と交趾占城

世祖會てコーチ(安南)を降ししが、その隣邦コーチシナの招きに應ぜざりしかば、路をコーチに借りて、これを伐たむとせしも、コーチ王、聽かず。故にまづこれを征せしに、元軍疫に

苦みて功なく、遂にその和を許し、(三三〇)ユーナシナ、また次いで降り、世祖は進みて、スマトラを降し、ジャワを破り、その威南洋の諸國を壓し、皆元に来貢せしめたり。

第十二課 元の領土 東西洋の交通

元の版圖

元は、太祖より以下數代の間、絶えず四方を經略せしが、世祖に至りては、その領土實に歐亞二洲に跨り、空前絶後の大帝國を建設したり。而してその域内には、また四汗國あり。(一)キップチヤック汗國は、今ロシア地方を領す。(二)イル汗國は、今のペルシアの地方を領し、プラーグの所封たり。(三)ジャガタイ汗國は、今の中亞の地にて、ジャガタイの封地たり。(四)オゴタイ汗國は、アルタイ山附近の地にて、太宗の子孫これを

四汗國

治む。これらの諸汗國は、各大版圖を領して、皆世祖統制の下に立てるものなり。

歐亞の交通

かかる蒙古の大帝國は、更に、官道を開き、宿驛を設けて交通を便にせしかば、歐亞二洲の交通貿易盛んに行はれ、南方支那の泉州、福州諸港は、實に當時海路の要衝なる繁昌の貿易場なりき。かかれれば、

遠く伊太利人マルコ
ポーロの來りて、世
祖に仕へたるのみな
らず、アラビア・ペルシ
アの學者、或はイタリ
ア・フランス等の軍人、
畫家・建築家など陸續



像の | ンポ | コルマ

來りて元朝に仕へしかば、天文・數學・砲術等の歐洲の學藝は、東亞に傳はり、支那の羅針盤・火藥・印刷術などは、また西歐に傳はりたり。

第十三課 ハイツの反 元の衰亡

ハイツの亂

元は世祖の時、隆盛の極に達したるも、同時にまた衰運の兆を現出せり。曾て世祖の即位するや、太宗の孫ハイツ心甚だ平ならず、遂にその封地オゴタイ汗國に據りて反す。ジャガマイ汗ポラク、およびキツプナヤツク汗マンクナムルは、共にハイツを助け、推して大汗となし、(九年ニシテ)元を侵し、滿洲諸王を誘降して、世祖を夾攻せん事を計りて成らざりしも、その勢は、なほ依然として盛んなりき。世祖崩じ、成宗立つに

三汗國の獨立

及び、ハイツは大舉して東侵せしが、却つて大いに海山(ハイン)に破られ、ほどなく死し、(二年三〇)ついで武宗に滅ぼされたり。(三年〇八)かくて四十年の紛亂漸く鎮定したれども、その他の三汗國は、これより遂に獨立するに至りぬ。

元朝の衰微

世祖連年の外征とハイツの交戦とにより、財政次第に困窮し、遂に交鈔(紙幣)を濫發するに至りぬ。内憂外患あひつき、遂に國家の覆滅を招くに至れり。今その原因を考ふるに、(一)特種なる蒙古の相續法なほ存し、成宗以下八代の間、多少繼承の争を來さざる事なく、これがために、權臣專横の因をなしたること、(二)世祖以來喇嘛教を尊びて僧侶の專横を來し、姦民の暴惡を招きたること、(三)交鈔を濫發して財政を亂し、收斂を行ひて民心を失ひたること、(四)權勢を中書に集めて、大臣の跋扈を招きたること、(五)世祖以來漢人を重用せずし

其五大因

明の興起

て不平を懐かしめたること等、實にその主因にて、成帝以下、殆ど四十年間、數朝に亙り、騷擾常に已む時なかりき。

元の形勢すでにかくの如くなるに、順帝立ちて(三三三)政を顧みざりしかば、喇嘛僧は驕横を極め、交鈔の信用は空しくなり、大臣の専恣また甚しきを加へしかば、民心遂に元を離れたり。されば、その隙を窺ふ有爲の漢人は、所在に崛起して獨立を圖り、(七三四)紅巾の賊まづ起れり。次いで、朱元璋(濠州の漢僧)といふもの、大いに勢望を得、遂に金陵(江蘇省南京)を取りて、これに據り、江の南北を略有し、その勢に乗じて燕京を伐つ。順帝敵すること能はず、上都(開)に遁れ、元遂に亡びぬ。(八三六)かくて朱元璋帝位に金陵に即く、これを明太祖とす。

元の滅亡

第十四課 明の初世

天下の統一

明の太祖、既に中原を略定しければ、更に兵を北西に用ひ、全く元の遺族を討平し、漢南・滿洲の地全く明に歸しぬ。太祖は同時に、元の遺將を山西・陝西より驅逐し、また蜀南・四川の地を平げ、遂に大理・金齒の諸蠻を降服して、天下を統一したり。(二三八)

太祖の政治

太祖天下を統一して後、専ら意を内治に留め、律令(大明)を制し、制度を定め、學校を起し、元俗を變じて、衣冠を唐宋の舊に復し、中央には六部の官を置き、政務を分掌せしめて、宦官を抑へ、布政司・按察使を設けて地方を管せしむ。また刑を嚴にし、賦を軽くし、宋代に鑑みて、宗室(三十一)を要地に封じ、邊要の防備を嚴にし、前朝の弊政を一洗せり。かくて帝の朝は太平なりしも、身後の變を慮り、殆ど功臣を誅除せしかば、その

死後には却つて内亂を鎮すること能はざるに至れり。

太祖崩じて(八三九年)惠帝立ち、諸王の強横を怖れ、これを抑制

せむとせしが、燕王ま

づ反して南侵し、金陵

遂に陥り、惠帝出奔し

て行く所を知らず、よ

りて燕王自立せり。(一〇二四年)

これを成祖といふ。

この時、名儒方孝孺は、

節を守りて難に殉せ

明太祖の像



燕王棣の
篡立

り。成祖は都を燕京に遷して、北京といひ、金陵を南京と稱したり。かくて成祖は、諸王を安んじて國政を整へ、まさに威を四方に輝さむとす。

成祖とコ
ト

成祖は、コトナを伐ちて、(一四〇六年)これを平げ、威勢大いに南海に振ふ。シナム・スマトラ・ジャワ・琉球等の諸國も、皆風を望みて前後入貢せり。

成祖は、また親征して韃靼・ウエラを降し、外征の功著しかりしも、韃靼・ウエラは、終に明の大患をなすに至れり。

成祖と韃
靼ウエラ

第十五課 帖木兒の兼併

元の東方に衰亡すると同時に、西方のジャガタイ・キツプナヤツク・イルの三汗國も、また漸く衰運に傾けり。

帖木兒の
興起

帖木兒は、蒙古の疎族にて、サマルカンドに生る。(一三三三年)初めジャガタイの部酋(ハタラシユ)なりしが、その衰頹に乗じて、中亚細亞を占奪し、汗位に即きたり。(一三六九年)ついで葱嶺を

越えて、シヤガタイ汗國を滅ぼし、好を明に通じ、また西進して更にホラズムを伐ちて、これを併せ、直ちにキツプナチャツク國と境を接したり。

帖木兒と
キツプナ
チャツク

キツプナチャツク汗國はバツより五傳して、(三三三)エシプトと婚し、東羅馬および歐洲の諸國と交通して、文化を導き、盛運を極め、再傳してナヤニベクに至り、勢益強大となり、ポーランド・ホンガリーを破り、イル國を攻めて歐洲を震動し、極盛時代を致したり。その後、弒逆あひ續き、バツの正統遂に絶えて、白黨ウズベク・クリムの三汗、互に汗位を争ひて、國內騷然たり。ナムールよりてクリム汗のトクタミツシを援けて、キツプナチャツク汗とせしに、クリム汗は、ロシアを征服し、勢に乗じて、ホラズムを侵食せしかば、帖木兒大いに怒り、ロシアに入りて、クリムを破り、モスコー府を掠め、白黨汗をキ



帖木兒及その廟

ツプナチャツクに立てて歸れり。(一三九〇年)印度は、古來屢外人の侵寇を蒙り、國內諸侯の分争、また甚しくて、統一することなかりき。當時トグルツク朝すでに立

帖木兒と
印度

帖木兒と
土耳右の
バジャゼ
ット

ち、一時は頗る盛大なりしも、モハメツド王に至り、威力衰へて、國土分裂せしかば、帖木兒これに乗じて、ヒンヅクッシ山を踰えて、印度に侵入し、デルヒを陥れて掠奪を恣にせり。(三一九年)會、西方の形勢不穩なりければ、急に軍をかへせり。(一九九年)トルコ人は、成吉思汗西征の際、裏海の東岸より逐はれて、西方オトマンに走り、イラン汗國の衰微に乗じて、小亞細亞の地にオトマン帝國(土耳其帝國)を建てたり。(一九二九年)これより國勢次第に振ひ、東ローマ帝國のアドリアノールを占略したることあり。その子バジャゼット(一九三八年)武略あり、ホンガリ、東ローマを侵して、歐洲を震動せしめ、更にエシプトと結びて、帖木兒の領土を侵さむとす。帖木兒報を得て、印度よりシリアに向ひ、まづエシプトの兵を破り、バジャゼットとアングラ城外に血戦し、これを擒にし、(一九四〇年)小亞細亞を平定

帖木兒の
領土

世祖の領
域

して東に還れり。

帖木兒すでに亞細亞三面を経略せしかば、更に明を伐ちて、天下を統一せむことを圖る。明の成祖、これを聞きて、その備をなししが、たまたま帖木兒病んで途(オトルク)に死せり。(一九四〇年)帖木兒は、兵を用ふること三十年にして、能く、ジンギス汗領土の四分の三を攻略し、その版圖、歐亞二洲に跨り、小亞、中亞、露西亞、印度、ヘルシアを領したり。されど死後、諸子位を争ひて、内訌を招きしかば、さしも廣大なる版圖、忽ち瓦解しぬ。

第十六課 明の中世

成祖より仁宗を経て、宣宗に至り、(一九四三)交趾の亂、藩王の反ありしも、楊氏の三賢よく政をたすけしかば、國家太平な

土木の變

ウエラの
衰勢

宦官の
專横

りき。英宗繼ぐに及び、宦官は跋扈し、ウエラは入寇せり。英宗は、宦官王振の勸に従ひて、ウエラを親征し、土木(直隸宣化府)に至り、大敗して虜となる。(一四四年)ウエラのエセン進んで、北京に逼りしが、于謙など景帝(英宗の弟)を立てて防戦し、よくこれを破れり。エセン遂に和を講じ、英宗を送りて歸り。(一四五七年)遂に可汗となりしも、次いで弑せられ、ウエラ部の勢遂に衰へたり。

英宗、憲宗の世、宦官威柄を弄し、孝宗よく内外に處せしかど、武宗に至りては、宦官の(所謂八虎)專横その極に達し、遂に安化王の亂起れり。(一五〇五年)その後、また寧王の反あり、幸に王守仁(明)の力によりて、これを平ぐることを得しも、(一五〇九年)今は奸人すでに朝に満ちて、忠臣志を得ず、國力次第に衰微して、邊境益多事となれり。

韃靼部は、一時力大いに衰へしが、ダヤン可汗に及んで、國

力を恢復し、屢明に寇せり。(一五〇九年)その孫ボナ可汗となりて、漢南蒙古の東部を有す。一族アルタンその西部を領し、勢盛んにて、山西に寇し、(一五〇四年)甚だ劫掠を恣にせり。時に明の世宗(武宗の次帝)位にあり、宦官權を専らにして、功將會銳などを殺ししかば、つひに、北寇を防ぐこと能はざりき。アルタンも喇嘛教を信するに及び、漸く戰鬪を厭ひて和を通じたり。かくて、穆宗以來、北方やや事なきを得たり。

第十七課 南東諸國および倭寇

第一節 交趾・緬甸・暹羅の盛衰

成祖の時、交趾を滅ぼして、安南布政司を置きしが、民その施政を悦ばず、黎利遂に兵を擧げて明兵を破る。宣宗これと

安南(大越)

和し、布政司を廢して、安南王に封せり。利は國を大越と號し、今のトンキンに都せり。(二四三)アンナンこれより世々支那の外藩となりぬ。その後、安南の勢頗る振ひしも、やがて、南北の大越に分裂したり。(七五二)

ビルマ

ビルマも成祖以來、明に朝貢せしが、世宗の時、雲南の蠻酋、孟養に破られ、その都城(テウ)また陥りたり。その後、遺族莽瑞體起りて、孟養を降し、老撾(カマ)・シナムを破り、傍近を征服して、勢頗る強く、遂に明に寇せり。その子莽應裏の時、神宗に破られて、ビルマの勢全く衰へたり。(二五八)

暹羅

暹羅は、もと二部に分れしが、元末よりあひ合して、明に朝貢せしも、ビルマの衰ふるや、また頗る勢を得たり。

李氏高麗王となる

第二節 高麗・朝鮮の興亡

朝鮮王

高麗は、久しく元に壓せられて、國力萎靡し、驕臣跋扈し、加ふるに倭寇の難ありて、政令大いに亂れたりしかば、宿將李成桂といふもの、遂に王位を奪ひて、漢陽に都し、明太祖の封冊を受けて、朝鮮王となる。(三三九)これを朝鮮の太祖といふ。爾來朝鮮は、明の外藩となりぬ。

倭寇

元末より、わが西陲の流民出でて、高麗・支那の沿海を掠め、その勢甚だ猖獗なりしかば、これを倭寇といへり。わが足利義満、好を明の成祖に通じてより、倭寇漸く跡を絶ち、通商貿易も、また開けたり。(永樂はこれの時に傳はれり)その後、足利氏衰へ、倭寇また起りて、連年東南一帯の沿海に掠奪を恣にし、世宗も、實にその防禦に苦みたり。されど、愈々大猷(ダイ)などが、倭寇を福建に破りしより、(三五六)その勢漸く衰へ、殘黨は退きて、臺灣に據り、沿

岸に出没すること、なほ已まざりき。

豊公の征韓

この時に當り、日本の豊臣秀吉は、大舉して、朝鮮を伐ち、八道(二五九)を風靡せり。明の神宗、朝鮮王李昭を援けたりしも、連戦連敗したりしかば、大いに怖れ、沈惟敬(シウイキョウ)をして、和を乞はしめたれど、議成らず、日本の軍、再び朝鮮に入り、互に勝敗ありしが、會、秀吉歿して、師をかへせり。(一五九)後、徳川氏、政を執るに至り、(八年)朝鮮と好を通じたり

第三節 日本・明・朝鮮の交戦

第十八課 清の興起 明の滅亡

明の衰進

朝鮮の役は、前後七年に亙り、大軍を續發したれば、明の財

一、財政の紊亂

二、明黨の争禍

三、流賊の蜂起

政は、いたく亂れたり。ことに、外には、北方滿洲の地に、愛親覺羅氏起り、内には、朋黨の争甚しく、國運一層衰へたり。當時、明の學者漸く實學に向ひ、氣節を尙び、盛んに國事を議する風ありしが、神宗の時、顧憲成、官を辭して郷に歸り、同志を會して、學を東林書院に講じ、盛んに朝政を可否し、海内氣節の士、争ひてこれに遊び、その勢甚だ盛んなりしかば、在朝の官吏、これを惡みて、東林黨と名づけ、互にあひ軋轢せり。神宗、光宗を経て、熹宗に至り、東林黨、一旦勢力を得しも、宦者魏忠賢、事を用ふるに及び、反對黨と結託して、東林黨を斥けたり。忠賢は、益專恣となり、毅宗立ちて、これを誅除せしも、朝政は全く亂れて、また如何ともすべからざるに至れり。

國用の不足は重歛(シウケン)となり、不平の聲天下に滿ちて、流賊四方に蜂起し、且つ陝西の地大いに飢ゑ、人心安からず、李自成

明の滅亡

張獻忠遂に兵を擧げ、(一六六三)所在の流賊これに應じて、勢力烈しかりしかば、毅宗これを防ぐ能はざりき。後、獻忠死し、李自成ひとり勢を擅にし、西安に據りて國を大順と號し、遂に進みて北京を陥れしかば、毅宗自殺し、李自成遂に自成帝となり、(一六四四年)清の世祖も次いで北京に入り、明全く亡べり。

儒學

第十九課 元明の學藝・宗教および美術

元明の儒學は、ただ宋學を宗として、これを守りしのみ、(元明を除く)元には、程朱の學行はれ、姚樞、許衡、吳澄の諸儒出でたり。要するに、元は歴世の勸獎に拘らず、儒學甚だ盛んならざりき。明に至り、太祖、成祖盛んに文運を進めければ、薛瑄、胡居仁など、まづ程朱の學を發揮せしが、王陽明出づるに及び、陸象

文學



王陽明の像

山の學に基きて、良知説を唱へ、一代にて、よく天下を風靡せり。陽明學これなり。されど、王學も漸くその弊に陥り、遂に狂禪の名を被りぬ。

元は、文藝にも盛んならず。ただその特色と見るべきは、小説、戯曲の發達のみ、水滸傳、西廂記等は、その著明なるものなり。明に至つては、文華大いに發

達し、國初には、まづ、宋濂、方孝孺、文を以つて著はれ、劉基、高啓は詩を以つて鳴る。孝宗、世宗の間には、李東陽、李夢陽、文名を擅にし、その後、李燮龍、王世貞、歸有光等出でて、一世を風靡し

たり、戯曲小説も、また大いに發達し、西游記・金瓶梅等の傑作
出でたり。

宗教

元の宗教中、最も盛大を極めしは喇嘛教なり。(一)喇嘛教は
佛教の一種にて、印度より、西藏地方に傳はりしものなるが、
元太祖の西藏を征服するや、政略上喇嘛僧を迎へて、帝師と
なしてより、大いに勢力を得、その教徒は、遂に元の國政を亂
すに至れり、明の時、黃教・紅教の二派に分れてあひ排し、紅教
は遂に衰へ、黃教獨り清朝に傳はり、今なほ盛行せり。(二)佛教
は元以後に至りて、全く衰へぬ。(三)道教も元の時衰へたれど、
明初より、大いにその勢を挽回したり。(四)基督教は、唐以後、久
しく廢絶に歸せしが、元の時、歐亞の交通廣く行はれし結果、
ネストリオン派の基督教再び傳來し、特に世祖の優待は、そ
の勢力を加へしめたり。明に及びては、シエニユイット派の

西僧續々來りて、盛んに傳道し、大いにその勢力を張りぬ。神
宗の如きは、かれらの天文に明かなるを喜びて、深く信任し
たりき。

文字

元の世祖の時、始めて蒙古字を作らしめたるは、頗る注意
すべきことなりとす。

美術

この時代には、美術・工藝また大いに發達せり。文徵明・董其
昌は、書を以つて著はれ、沈周・庚寅等は、花鳥の畫に妙を極め
たりといふ。

第四篇 近世史

第一課 清の建國 世祖の一統

愛親覺羅氏
金の滅後は、女真全く振はざりしが、明末に至りて、愛親覺羅、俄然として起れり。

國を滿洲と號す
國を清と改む

滿洲の一部愛親覺羅は、初めオトリ地方に居り、後、ホトアラ(盛京)に移るに及び、漸く強く、近傍の諸部落を併せ、勢頗る強大となり、遂に帝位に登り、國を滿洲と號せり。(一六三)清の太祖これなり。太祖は次いで瀋陽(奉天)を陥れ、都をここに奠む。太宗繼ぐに及び(一六三)明を破り、國號を清と改めき。(一六三)當時朝鮮は、明と結びて清に抗せしかば、太宗伐ちてこれを降し、(一六三)封冊を授けたり。太宗は更に南侵し、明の媾和を斥

都を北京に移す
明末の諸王



清太祖并奉天府における太宗皇帝の廟

け、吳三桂を破り、益内地を掠めて山海關に及び。この時に當り、明の流賊獷狽にて、北京は陥り、毅宗は自殺して、李自成位を僭したり。時に清の太宗すでに死して、世宗立ち、李自成を討滅し、都を北京に遷せり。(一六四)毅宗の崩するや、福王、唐王あひ次いで江南に據り、明業の恢復

世祖の
一統

を圖りしも、皆敗れて清に捕はる。また永寧王は江西に敗れ、廣西の桂王は雲南に走り、浙江の魯王は廈門に逃れて鄭成功に投じ、これと恢復を計りて、遂に利を失したり。よりて廈門を退き和蘭人を逐ひて臺灣に據る。(二六六)成功は芝龍の子にて日本に生れ、忠勇比なく、死力を舉げて恢復を圖り、援を日本に乞ひて成らず。大勢全く去りぬ。すでにして桂王はビルマに捕はれ、魯王成功あひ踵いで歿せしかば、明祀全く絶えて、世祖海内一統の業遂に成りぬ。(二六六)

第二課 聖祖の功業

第一節 三藩の亂 臺灣の平定

世祖の後、聖祖位に即き、(二六六)まづ三藩の亂あり。初め明



清聖祖の像

の降將吳三桂を雲南に、尙可喜を廣東に、耿繼茂を福建に封じ、文武の權を授けて、明の遺民を鎮壓せしむ、これを三藩といふ。かくてその勢力強大となるを見て、撤藩の議を起しければ、三藩安んぜずして、三桂まづ反し、(二六七)耿精忠(子)尙之信(子)あひ次いで兵を舉げ、曾て辮髮令に不満なる明の

遺臣も、これに應じて、つひに天下の大亂となり、江南の地は、全く反徒の手中に落ちたり。聖祖討平を力めしかば、精忠・之信あひ次いで降り、吳三桂の勢日に蹙りて、病死す。よ

臺灣の平定

りて、清兵進みて三桂の子世璠を破り、九年の大亂全く平きぬ。(二六八)

鄭成功の死後、その子鄭經なほ臺灣に據り、三藩の亂起れる時、耿精忠と連和し、一時大いに勢を得たりしも、鄭經死して、その子克塽嗣ぐに當り、三藩の亂すでに平きければ、清將施琅臺灣を伐ちて、これを降せり。(二六八)

第二節 清・露の交渉

欽察と阿羅思

臺灣平定後、聖祖は更にロシアと交渉して、北方の境界を定めたり。今少し溯りて、ロシア東漸の状を述べむ。

曩に、パツガロシアを征服して、キツプナヤツク汗國の附屬となししより、二百四十餘年間、ロシアは、これに臣事した

露人の東漸

りき、モスコー大公イワン三世の時、キツプナヤツク汗の勢力大いに衰微し、國內分裂せるに乗じて背き、遂にキツプナヤツク汗アーメツドを殺して獨立せり。(一四八) ついで、イワン四世に至り、連りに蒙古諸小汗を討平して、ウラル山西の地を領し、ロシア帝國を建設したり。

當時ウラル山東には、クナエムといふもの、トボルスク附近の(シベリア)地を領して、シビル汗と稱せしが、ユサツク部(ハ)の酋長エルマルクはイワンの命を受け、ウラル山を踰え、(一五八)シビル汗の地を略して、之をイワン四世に獻じたり。これ露人東漸の第一歩なり。

イワン四世以後、歴代の間ユサツクを遣はし、専ら意を西比利亞の侵略に傾けしが、ポヤルユツフ・ハバロフなどあひ次いでシベリアを探檢侵略して、地を東方に拓きたり。特に

露清の
交渉

ネルチン
スク條約

ミケール三世の時、ユサクの酋長ハバロフは黒龍江の上流にアルバジン(薩雅克)城を築きて滿洲に侵入したりき。會清の聖祖は三藩を平げ、臺灣を降して、中原全く平定せしかば、大兵を擧げて、アルバジン城を攻め、互に勝敗ありて、事容易に決せざりしかば、聖祖書を送りて、境界を定めむことを求む。ロシア帝ペートル一世もこれに應じ、ロシア使節ゴロウインは、清使スオトとネルチンスグ(黒龍江上流)に會す。ロシアは遂に讓歩して和議成り、外興安嶺以南は清朝の有となりて、兩國の境界始めて定りぬ。これをネルチンスクといふ。(一六八九年)

第三節 清朝と西北諸族

當時、西方ウエラ(瓦剌)のジュンガル部(伊犁地方)にガルタン出で、西

外蒙古

藏、青海および天山南路の地を併領して、大いに勢を張り、カルカ(外蒙古の地)部に東侵せり。カルカの酋長防ぐこと能はず、走りて援助を清に乞へり。聖祖ガルタンを諭しし後、遂に親征して大いにこれを破り、ついで全く阿爾泰山東外蒙古の地を收めたり。(一六九〇年)(内蒙古は曾て太宗の七年に清領となれり)

西藏

この時ガルタンの姪、チエリンアラフタンは、すでにそのジュンガル部(衛拉特部)を奪ひ、次いで西藏を征略せむとす。聖祖報を得て兵を發し、大いにジュンガルを破りて、これを西藏より逐ひ、新に第六世ダライ喇嘛を立て、蒙古兵を駐めて、全くこの地の實權を握り、威を西藏に振へり。(一七〇二年)

青海

聖祖は在位六十一年にて崩じ、世宗そのあとを承けて、(一七二三年)雍正と改元す。たまたま青海のラボツアンタン(三反)にして、清に抗せしが、清兵に撃破せられて、ジュンガルに奔り、

この地も、また全く清の有に歸し、(四七三)駐藏大臣をラツサに置きたり。

第三課 高宗の偉業

第一節 西方経略

世宗在位久しからずして崩じ、高宗位を承け、(五七三)乾隆と改元す。これよりさき、チエウツンアラフタンの子、ガルタンチエリング、屢清に寇せしが、この時すでに死して、タツナ立ち、一族アムルサナの専恣を悪みてこれを逐へり。アムルサナ清朝に降り、哀を乞ひければ、高宗兵を發してタツナを執へ、アムルサナをして、ジュンガルを領せしめたり。(五七五)やがて、アムルサナまた反せしかば、高宗大いに憤り、伐ちてこ

ジュンガル
(天山北路)

回部
(天山南路)

れを滅ぼし、全く天山北路の地を領せり。(五七五)

天山南路は、カシユガル汗の領地にて、人民皆回教を奉ずるにより、これを回部といふ。汗の二子ブラニード・チーナーチエンは共に、アムルサナの反に與みせしものにて、なほクーチヤ城に據りて、清朝に抗せり。高宗またこれを伐ち、全く天山南路の地を併せたり。(五七六)かくて、西域の地全く清の版圖に歸し、ユーカンド、アフガンの諸國も、また來貢して、國威は葱嶺の以西に及べり。

西域征定

第二節 南方経略

清の西方を經營するに乗じて、貴州・雲南の蠻部、まづ反せしかば、世宗これを平ぐ。高宗は四川の諸蠻を降して、(五七七)

ビルマ

更にシナム・ビルマ・アンナン等と交渉を始めたり。ビルマは、明神宗の頃三部に分れ、一旦、ベীগに統一せられしが、(初)清高宗の時オングセヤ出でて、三部を統一して王と稱し、またシナムを伐ちてこれを併呑したり。(六)シナムは、明初ビルマより獨立せしも、その後國勢振はず、常に内憂外患に苦みたり。明末日本の山田長政、大いに國王に信任せられて、勢を振ひしも、その後、國威また揚らず、遂にビルマに併呑せられたり。ビルマ王は、勢に乗じて清の西南を侵ししが、高宗の再征に逢ひ、遂に和を請ひて事平きぬ。(九)この時に當り、フアヤダーク(八)隙に乗じてシナムに自立し、都をバンコックに定めたり。(七)後、フアヤダーク内亂に仆れ、フアヤナヤックリ継ぎ、好を清に通せしかば、高宗、これをシナム國王に封じたり。(三)これ現王朝の祖なり。

安南(大越)

明成祖の時、黎利トンキンに都して、大越帝といひ、黎瀨繼ぎて、勢更に振ひしが、その死後、内亂起りて、黎莫二氏(南)に分れたり。明の末、黎氏の將、鄭松は、莫氏を滅ぼして、大越を一統せしも、(二)ついで、阮潢反し、順化府に據りて、廣南王といふ。(六)黎氏と攻争すること百八十年にて、阮文岳、阮文惠の兄弟起り、(清高宗)まづ、廣南を仆ほし、次に大越を滅ぼして、二たびアンナンを統一せり。(六)黎氏の遺族、援を清に求めしかば、高宗これを征して利あらざりしも、阮文惠、後患を怖れて、罪を謝せしかば、高宗これを許して、封爵を授けたり。(八)

高宗最後の外征

高宗は、またヒマラヤ山南の蠻部ゲールカを伐ち、その國都カトマンドを陥れてこれを降せり。(三)これ實に、高宗最後の外征なりき。かくて、清の版圖たる、北は興安嶺、西は葱

清の版圖

嶺南はアンナン・シナムに亘り、その廣大なること、元を除きては、前古殆どその比なきに至れり。

第四課 清代の極盛時

制度文物および宗教

清初の聖宗(康熙)高宗(乾隆)は、いづれも名君にて、内はよく叛徒を平定し、制度を整へて、學藝文教を振興し、外は能く四境を征服し、境土を擴張して、國威を宣揚し、文にも武にも、眞に、清代極盛の時なりき。されば、この康熙・乾隆の二治を以つて、遠く貞觀、開元の上に加ふるものあり。今、左に、この二朝間に大成したる制度文物等の一般を述べむ。

(官制)中央政府には、内閣ありて、六部(吏部、戸部、禮部、兵部、刑部、工部)を統ぶ。内

清の極盛時

官制

中央政府

閣は大學士にて組織し、大政をつかさどり、滿漢各二人あり。六部の長官を尙書、次官を侍郎といひ、いづれも滿漢各一人ありて、政務を分掌す。また理藩院は、蒙古・西藏等を管轄し、都察院は、百僚を監察す。別に軍機處を置き、(高宗)内閣大學士および六部尙書・侍郎をその大臣に勅選して、これを組織し、軍國の大事を決せしむ。近時更に總理各國事務衙門と、海軍衙門とを設けて、外交海軍を統べしむ。

地方制度

支那本部を十八省に分ち、省の下に府、府の下に州および縣あり。一省若くは數省に總督を置きて、文武の大權を授け、その下に、各省の巡撫提督ありて、民治と軍事とを掌る。巡撫の下に、また、布政使(財政)按察使(司法)あり。この外に知府、知州、知縣等の諸官ありて、地方の政治を行へり。特に滿洲は奉天府尹と、將軍との分治に屬し、外蒙古は、定邊將軍に従ひ、その他の

兵制

外藩は、各地の部長を官吏として、これを治めしむ。官吏は、各廳いづれも滿漢人を併せ用ひて、互に抑制せしめたり。

(兵制)陸軍は、八旗と綠旗とに分る、八旗に、滿洲八旗(正黃、正白、正紅、正藍)蒙古八旗、漢人八旗の三ありて、京城滿洲および各地の要所に駐在す。綠旗兵は漢人より成り、本部各省の常備として提督の下に屬す。その他、本部に勇兵、内外蒙古、青海に旗兵、西藏に番兵あり。海軍は、近時の創設にて、北洋、南洋、福建、廣東の四水師より成れり。

學術

(學術)聖祖高宗は、大いに學術を獎勵せしかば、文運一時に隆起し、全く前朝理學の風を一變して、考證學を開きたり。そのまづ、明末清初には顧炎武あり、次で、閻若璩、毛奇齡、戴震、惠棟などの諸大家輩出し、益、この學を發達せしめたり。この外、宋學も並び行はれぬ。著述には、聖祖の康熙字典、佩文韻府、淵

文藝

鑑類函、および高宗の四庫全書目録、大清一統志、大清會典等は、いづれも、近世の大著述なり。曆學、數學もまた頗る發達したりき。(清初の孫奇逢、黃宗羲、李順の三氏は、經學、理學の泰斗として、その名高し。)

(文藝)文章には、魏禧、朱彝尊、侯方域、汪琬などの諸名家あり。詩には、錢謙益、吳梅村、王漁洋など最も著名なり。王鳴盛、錢大昕、趙翼、胡謂などは、史家地理學者としてその名高し、また戯曲小説などにも、金聖嘆など頗る名家を出たせり。

宗教

(宗教)道佛二教は、専ら本部一般に行はれ、喇嘛教は、西藏蒙古、滿洲に、回教は、天山南路より、甘肅、陝西附近に行はる。基督教は、明末より清初に行はれ、聖祖の力によりて、益、盛んなり。世宗の禁止以來、一旦挫折せしも、後また漸く流行の運に向へり。白蓮教は、高世以來、殆どその跡を絶ちぬ。

總敘

漸歐人の東

第五課 東洋における西歐諸國民

西歐人一たび東漸してより、東洋の大勢は、これがために一變し、印度・ビルマ・アンナン、その他南洋の諸島は、遂に皆獨立を失ひ、支那は、屢、大打撃を蒙りて、近世史の生面を改めたり。よりて彼等東漸の始末を述べて、更に支那の衰勢に及ばむ。

第一節 西歐人東漸およびその競争

葡萄牙人

東西兩洋の交通一旦トルコ帝國に遮ぎられしが、更に海上の新航路を發見して、歐人東漸の端をなせるものは、葡萄牙人なりき。葡人ヴァスコ・ダガマは、嘗て喜望峰を廻り、遂に印度のカリカットに達して(一四九八年)貿易を許されしより、葡人の東洋に航するもの頗る多く、印度西岸のゴアを取りてそ

の根據となし、(一五〇二年)次第に權力を伸べて、印度の東岸およびセーロンに商館を開き、進みてマラツカ・ジャワを略し、支那海に入り、(一五二二年)アマ港(即マニラ)を占領して根據とし、(一五三九年)遂に日本の平戸に來りて貿易を行へり。かくて百餘年間、葡人東洋の商權を獨占せり。

西班牙人

西班牙人は、葡人に次ぎて東洋に入り、まづ、ヒリッピン群島を占領して、(一五六五年)マニラを根據とせしが、(一五七二年)勢力大いに振ふに至らざりき。(一五八〇年)次いで西紀一五九六年、

和蘭人

和蘭人始めてスマトラに來り、これより葡人と争ひて、次第に勢力を張り、セーロン・マラツカ・スマトラ・ジャワ等の地に據り、更に臺灣を占領し、(一六三四年)盛んに、日本・支那とも通商せり。これより日本との貿易場は、平戸より長崎に移りぬ。殊に徳川氏鎖港令を布きて、蘭人のみに通商を許ししかば、蘭人

英吉利人

は、全く葡人を壓倒して、ひとり東洋の商權を握れり。
英人は、西紀一五七九年、すでに印度に來り、次第に南洋を
經て日本に到り、(三六二)支那と貿易を開きしが、蘭人、葡人な
どに妨害せられて、充分、兩國に發達すること能はざりき。さ
れど、東印度商會の設立より、(一五六)印度のマドラスを根據
として、ボンベイ、カルカッタ等に商館を設け、次第に、その勢
力を伸べ、西紀一六八〇年頃には、全く蘭人を凌ぎ、また大い
に佛人とも争ひて、遂には、最後の勝利を得て、印度を占領す
るに至れり。

天主教の
渡來

葡人東航の結果として、一五四九年以來、天主教は日本に
傳はり、ついで支那にも入りたり。

モガル帝
國の興亡

第二節 モガル帝國・英領印度

印度は、ナムールの征略以來、久しく無政府の狀に陥りて、
分裂争亂あひ次ぎしが、その六世の孫、バーベルはカプール
より印度に侵入し、デルヒを陥れ、ラヂャプト族を征服し、更
に近傍の地を降し、アクバル帝に至り、モガル帝國を建設せ
り。(一五五)帝の英明なること王朝第一と稱せられ、内外の施
政甚だ宜しきを得、よく回教徒と婆羅門教徒との争鬪を調
和し、アグラに都して、北中東部印度を統べ、國威極點に達し
たり、帝の後一代を經てアウラングゼブに至る。(一六五)また
頗る勇武にて、南印度を征定せしが、婆羅門教徒を虐待せし
より、その死後、國內大いに亂れ、四分五裂して、帝權全く地に
墜ち、外は連年ヘルシアの侵略を蒙り、内は諸侯各地に獨立
するも、これを制すること能はず、遂に西歐諸國民に乗せら

英佛の競

れて亡びぬ。

モガル帝國の衰運に乗じ、葡人・蘭人・英・佛人あひ踵いで來り、互に權力と利益とを争ひしが、葡・蘭まづ倒れて、遂に英・佛の衝突となれり。佛人は西紀一六〇四年、印度商社を設け、ボンヂチエリーに據り、英の根據地マドラスとあひ接近せしが、印度の亂離に乗じて、屢葛藤を生じたり。西紀一七四五年、英・佛本國の開戦につれて、印度にても、兩國民あひ戦ひ、佛の知事デウプレーは、遂にマドラスを占領して、一時英人を壓倒せしが、その後、英將クライブに破られ、勢力大いに頓挫したり。

英人の勝利

英人の益、盛大ならむと見るを見て、ベンガル侯スラシヤードローラ之を惡み、佛人と合して、英人を虐殺せしかば、英將クライブは、その軍をブラッシーに撃て、大勝を得、(七七年五)カ

英領印度

ルカッタ附近の地と收稅權とを得たり。爾來英人は、一難毎に權勢を重ね、ヘスチングスがクライブに代りて印度總督となりて、(七七年七)より、各地の副王の實權を奪ひ、また佛軍を撃ちて、威勢全印度を壓し、モガル朝廷も、遂にその保護を受くるに至れり。(四年八)これより英人は、大いに統御の策を講ぜしが、印度人これを悦ばず、ベンガルの土兵遂にまづ、亂を作し、不平の副王など起て、遠近あひ應じぬ。(七年八五)總督カンニング、よくこれを鎮壓し、モガル帝を廢し、代りて印度を領したり。後、殆ど、二十年を経て、英國女王ヴィクトリアは、終に印度女皇の位を兼稱するに至れり。(七年八七)

第六課 清朝の憂患 清・英・露の交渉

白蓮教徒の亂
回部の難

清の盛時は、すでに乾隆に極り、高宗の晩年に及びて、漸く衰運を兆したり。仁宗立ち爾來、内憂外患あひ次ぎ、國歩愈艱難となる。仁宗の初年には、まづ、白蓮教徒の亂ありて、騷擾七年に亘り、國力甚だ衰頽せり。宣宗の時は、また回部の亂あり、勢頗る猖獗を極めたり。その亂漸く平きて、西北纔に定りしも、ついで太患は東南に起りぬ。(二八三)

鴉片戦争

英人、すでに印度に勢力を得たれば、進んで支那と通商し、その特權を得るに及びて、(二八四)盛んに鴉片を輸入せり。その流毒、日を逐ひて甚しかりしかば、宣宗これを憂へ、林則徐を擧げて、兩廣總督として、鴉片の輸入を禁せしむ。則徐は、英商の鴉片を收めて、これを焼き、その輸入を嚴禁せしも、英商は、なほ密賣を行ひしかば、遂にその通商を禁せり。英政府怒りて、軍艦を遣はし、エリオットなどをして、清國を伐たしむ。

(二八四) 英兵まづ廣東を占領し、次いで、香港、廈門、寧波、吳淞諸港を封鎖し、鎮江、舟山島を降して、渤海に侵入せり。清軍連敗して、その敵すべからざるを知り、遂に、償金二千六百萬兩を納れ、香港を割き、廣東、福州、寧波、廈門、上海の五港を開くことを約して、局を南京に結べり。(二八四)

長髮賊

鴉片戦争後、清廷は、大いにその威嚴を損じ、加ふるに、財政大いに困窮して、士民重歛に苦みしかば、洪秀全これに乗じて、基督教徒を誘ひ、兵を桂林(二八五)に擧ぐ、(二八五)秀全みづから、耶蘇の弟子と稱し、國を太平天國と號したり。その徒、みな髮を蓄ふるにより、これを長髮賊といふ。秀全連りに官軍を破り、漢陽、武昌を陥れ、南京を取りて都となし、殆ど江南を奪ひ、更に清兵を江北に破りしが、會勤王の詔に應じて、曾國藩は、湘勇を募り、伐ちて江南を復し、李鴻章、左宗棠などもまた

各奮戦して、屢賊軍を破りしも、秀全なほ南京に據りて勢甚だ盛んなり。

英佛の來寇

清は、かくの如く内訌に苦めるに際し、英國商船(ハコ)と、廣東府吏との間に紛擾を生じ、(六八五)香港知事パークスは、怒りて兩總督に訴へしも決せず、會佛國の宣教師、清人に殺害せられしかば、英佛聯合して、廣東を陥れ、遂に假條約を天津に結べり、(一八五)翌年、英佛の公使は、共に條約を交換せんとて、太沽に至り、清人の砲撃に違ひしかば、英將グラント、佛將モンタウバン、兵を合して白河に逼り、天津を陥れて、北京を脅したり。(一八六)清廷遂に恭親王をして和を講ぜしめ、償金一千八百萬兩を出だし、基督教の保護、公使領事の派遣を許し、牛莊、登州、臺灣、潮州、瓊州、九江、漢口の七港を開きて事漸く平定せり。この時、露國公使大いに二者の間に斡旋したりき。

長髮賊平定

清露の交渉

外人侵入の間、賊勢益振ひしが、文宗崩じて穆宗(同治)立ち、救を外人に求めしにより、米人ロルド・バルケウイン、英人オールドンなどあひ次いで、官軍を援け、會國藩、李鴻章、左宗棠、劉銘傳などとあひ並びて、連りに賊軍を破り、遂に南京を陥れ、十五年間の大亂漸く平定することを得たり。(一八六四年)

ホルチンスク條約以後、露國は、東亞侵略の策を講じて已まず、世宗の時、キヤラクメ條約により、通商を約せしも、露國は、これに満足せず、益、東侵の歩を進めたり。ニコラス一世の時、シベリア東部總督ムラヴィヨフは、黒龍江口の地を占領し、長髮賊の亂あるを機とし、新に國境の協定を要求せり。清廷拒むことを得ず、黒龍江を以て界とし、江以北の地を舉げて、露國に讓與したり。(一八五八年)これをアイグン條約といふ。その後、英佛の軍、北京を陥るるに當り、露公使イグナチエフが兩間

愛理條約

樺太占領

に立ちて、調停の勞をとりたる報酬として、遂に烏蘇里江東の地を得たり。(一八六)これより、朝鮮と境を接す。當時露國は、樺太島に關して、日本との紛擾絶えざりしが、千島、樺太の交換を名として、遂に日本より樺太を收めたり。

第七課 露國の南略 露・清・英の交渉

露國の南侵

ナムール^{ナムール}の死後、その帝國は、遂に解體し、ペルシアの地も、久しく亂れしが、アガ、モハメツド^{モハメツド}出でて、十八世紀の末に、カザール朝^{カザール朝}を建てたり。然るに、露國は屢、ペルシアを破りて、その地を削り、西紀一八二八年には、遂にアラス河以北を奪ひたり。かくの如く、一方には、ペルシアを侵略したるのみならず、中亞の紛争に乗じ、皆これを滅ぼしたり。(一八七)かくて、露

清・露の交渉

は全く中亞の地を略し、その版圖、今や、東は支那の伊犁に接し、南は直ちにアフガンの境に迫りたり。

宣宗の時、一たび回部の亂を平げしも、長髮賊の變以來、天山南路の騷擾絶えず、伊犁もまた亂れしかば、露國は、邊境の鎮撫を名として、伊犁を占領せり。(一八七)穆宗は、甘肅總督左宗棠をして、回教の反徒を征定せしむ。次いで、今帝(光緒)立つ(一八七)に及び、左宗棠は、すでに西域を鎮定せしかば、露國に伊犁の還附を要求せり。露國は容易に應ぜず、清・露の兵、境上にあひ睨みしが、曾紀澤露國に使用するに及び、互に讓歩して、和議漸く成り、清國は、償金九百萬ルーブルを出だし、伊犁の返還を得て、新に境界を定めたり。(一八八)

英・阿の交戦

これよりさき、英國は、露國南下の勢盛んなるを見て、大いに憂へ、曾てヘルシアと同盟して、これを防がむとせしも成

英・阿の同盟

英・露の衝突

らず。更に中亞アフガンの諸國と合して、露に當らむとす。然るにアフガン王、事によりて、英國と快からず、却つて、露國と結託せしかば、英兵遂にアフガンに侵入せしが、(一九八三)その歸途に大敗したり。後一旦兩國の同盟成りしも、故ありて、アフガンは、露に與みし、共に結んで英人を排斥せしかば、英兵怒りて大いにアフガン軍を破る。(一九八七)この時、露國援けざりしがゆゑに、アフガンは、遂に英國と同盟し、地を割てその保護國となりぬ。(一九八七)

この時に當り、露は、すでに全く中亞の地を略し、更に進んでアフガンの西北境を侵ししかば、英國はアフガンを援けて、異議を挟み、二國、まさに兵馬に訴へむとせしも、和議漸く成りて、アフガンの境界を定めたり。(一九八八)その後、バミルの境界に關して、英・露、また、紛議を生ぜしが、西紀一八九五年、遂

に平和の局を結びたり。かくてアフガンの西北、および東北の二境全く定まりぬ。

第八課 南亞の形勢

英國とビルマ

英國は勢力を印度に張りて、終にビルマとその境を接したり。會、ビルマ王反徒を逐ひて、ベンガルに進入し、更に、アッサムを占略せしかば、英人怒りて、これを攻む。(一九八三)ビルマ軍、大いに敗れて地を割き、償金を納れて、和を乞ひしが、その後、再び戦端を開きてまた敗れ、(一九八五)英人を恨むこと、益、深く、その商人などを虐待せしかば、英國は、伐ちてこれを滅ぼし、遂に、その屬國に加へたり。(一九八八)これよりマライ半島の諸國また踵いで、英國の保護を乞ふに至りぬ。

佛國とアンナン

曾て阮文惠の廣南を滅ぼし、アンナンを統一せし時、廣南の王子阮福映は暹羅に走りて、佛國の宣教師と謀り、事成らば、地を割き通商を許さむことを約し、佛國の援を得て、遂に、阮文惠の子孫を滅ぼし、アンナンを統一し、國號を越南と改め、(三八年)清の封冊を受けたり。然るに阮福映は、佛國に對して前約を履まず、却つて宣教師を虐待せしかば、兩國の紛擾絶えず、佛國は遂に代りてサイゴンを占領せり。(一八五五年)會、トンキンの叛亂に際せしかば、アンナンは、せんかたなくて、和を求め、償金を出だし、コーナシナの南部を佛國に讓與したり。(二八年)翌年、カンボチャもまた佛の保護國となりぬ。(三八年)かくて、アンナンは益、佛人を恨み、宣教師を殺害せしかば、佛人は、遂に兵をこの地に進め、紅河通航、基督教公布、および、採鑛の權を求めたり。時に長髮賊の餘黨、劉永福、黑旗軍を率ゐ

清・佛の交戦

て、この地にありしが、安南王の命を受けて、佛軍と戦ひ、互に勝敗あり。佛軍順化府を陥るるに及びて、安南王遂に和を媾じ、トンキン地方を割きて、佛の保護國となりぬ。(三八年)清國は、佛國アンナンの和議に對して異議を唱へたり。それは、アンナン國は、すでに清國の封冊を受けたればなり。されど清は、李鴻章の議に従ひて、一旦その異議をやめしも、偶、清の兵、諒山鎮に衝突せしかば、佛國は、償金(一千万)を清廷に要求し、その斥けらるるや、遂に、戦端を開けり。(一八八四年)まづ佛將クールペーは、海軍を率ゐて福州を攻め、殆ど福建艦隊を全滅し、なほ、澎湖島を占領して、臺灣諸港を封鎖し、陸軍は、まさに進んで鎮内關に入らむとす。この時左宗棠など能く抗戦せしも、會、クールペーは死し、また本國の内閣に變動ありて、對外の政策を改めければ、兩國の和議成り、清國は、澎湖島

シアムの形勢

を返して、償金の要求をやめ、清國は、アンナンに對する主權を棄てて、トンキン地方を佛國に占領せしめたり。(一八八五年) シアムは、英佛が連りに諸隣國を征服するを見て、國是を改め、まづ、英國に通じ、ついで、佛米清と結べり、聰明なる今王ナユラロンコルン立ち、(一八八五年) 夙に歐米の文物に則り、内治を整へ、日本と結びて舊交を温めたり。(一八八七年)

第九課 日・清・韓の關係 二十七八年の戰役

臺灣事件と日清交渉

日清の交渉は、臺灣事件より始れり。明治五年、琉球の漁民、暴風に遭ひて、臺灣に漂著せしもの六十餘名、生蕃に殺戮せられしかば、日本の大使副島種臣、往いてこれを清國に問ひしに、清廷は、化外の民なりとて、交渉を避けたり。よりて西郷

琉球

日韓の交渉

從道に命じて、生蕃を伐たしめしに、清國俄に異議を唱へしかば、大久保利通を清國に派して、談判せしむ。英公使ウエーアの仲裁によりて、償金五十萬兩を收めて、臺灣征討の師を召還したり。(一八七四年) 日本は、その後琉球王を廢し、沖繩縣を置いて、日本の版圖たることを明示せしに、清國、また、異議を唱へたり。爾後兩國の感情次第に圓滑を缺くに至りぬ。

朝鮮は、明の末、大いに日本の侵略を受け、甚だこれを怨みしが、徳川氏の修交によりて、やや和親するに至りしも、仁祖以來、常に清國に臣服して、その封冊を受けたり。仁祖九世の孫、今帝李熙の立つや、(一八六三年) その父大院君政を攝し、頗る國政を革新せり。されど、甚しく耶蘇教徒を忌みて、これを虐待せしかば、佛國は軍艦を派し、江華島を占領して、その罪を責めしも、その功なくて歸れり。(一八八六年) 後、北米合衆國も、軍艦を

日韓條約
と獨立承認

派して漢江に溯り、朝鮮に開國を逼りしが、また功なくて退けり。わが國は、王政維新の際より、使を派して修交を求めしに、大院君まさに佛米を退けて意大いに傲り、固く鎖國主義を執りて應ぜず、却りてわが軍艦を江華島に砲撃せり。(二八七年)よりて、黒田清隆を遣はしその罪を詰問せしめ、始めて、朝鮮の獨立を承認し、新に條約を結び、釜山・元山・仁川の三港を開かしめぬ。(一八七六年)これより米・英・露佛の諸國もまた次いで、その獨立を承認するに至れり。

韓の内勢

朝鮮王長じて、政を親らするに及び、政權全く閔后一族の手に歸せしかば、大院君は、怏々として常に樂まざりしが、明治十五年(二八年)兵士を煽動して閔族を殺し、更に日本の公使館を焼きたり。されば、朝廷井上馨を遣はして、その罪を責め、遂に償金五十五萬圓を取り、且つ公使館守護の兵を駐む

黨争

ることを約して事平きぬ。然るに清は、大院君を北京に送り、また名を公使館護衛に藉りて兵を京城に駐めたりしかば、國內の守舊者は、専ら清國によりて、その外藩たらむと欲し、改進黨は、日本に頼りて、獨立の體面を保たむことを期し、兩者の軋轢益甚しきに至れり。一を事大黨といひ、他を獨立黨といふ。獨立黨の首領朴泳孝・金玉均など、漸く勢を得、遂に王を擁して、事を擧げ、事大黨の閔泳翊など數人を殺して、援を我公使に乞へり。(一八七四年)然るに清兵は、事大黨を援けて、獨立黨を破り、更にわが公使館を焼きたり。わが國、また井上馨を遣はして、その罪を問ひ、償金十三萬圓を取りて、平和の局を結び、別に伊藤博文を清國に派遣し、李鴻章と天津に會して、左の條約を結びたり。(一八八五年)

天津條約

一、兩國の朝鮮駐在兵を撤去すること。

二、爾後朝鮮に軍隊派遣の必要ある時は、兩國互に
ひ通告すること。

當時朝鮮の獨立黨は、斥けられて多く國を去り、事大黨ひ
とり權を弄し、清公使袁世凱とあひ結託して跋扈せしかば、
早晚日清の衝突は避くべからざらむとす。

會、明治二十七年、朝鮮に東學黨の亂起る。東學黨とは西教
を排斥し、東學を振ひ興さむことを目的とせる一團にて、勢
甚だ猖獗なり。韓廷防ぐこと能はず援を清に乞ひしに、清は、
これに應じて兵を牙山に出だせり。されば日本も兵を京城
にやりて居留民と公使館とを守り、且つ清に提議して、共に
朝鮮の事を謀り、その獨立を扶持せむとしたり。然るに清は、
天津條約を無視し、朝鮮をその外藩なりと唱へて、わが國の
撤兵を要求せしかば、日本は、まづ大院君を起して攝政とな

二十七八
年戦役

日本の大
勝

し、次いで牙山の清兵を拂ひ、豊島に清艦を破りて宣戰を公
布せり。(一八九四年)

この時に當り、わが第一軍は、山縣有朋これを率ゐて、清兵
を平壤に撃破し、長驅して鴨綠江を渡り、清國に入り、伊東祐
亨は、艦隊を率ゐて、大いに北洋水師を黃海に破り、大山巖は
第二軍を率ゐて、直ちに遼東半島に上陸し、大連・金州・旅順を
陥れ、進みて第一軍と合し、牛莊を抜き、別軍を派して威海衛
を陥る。伊東祐亨また北洋水師を降し、渤海灣の關門を奪ひ、
一軍は、また南して澎湖島を占領せり。清國力屈し、李鴻章を
日本に遣して和を請はしむ。伊藤博文陸奥宗光これと馬關
に會し、(一)清國は、朝鮮の獨立を承認する事、(二)清國は、償金二
億兩を出だし、遼東半島・臺灣・澎湖島を割與する事、(三)沙市・重
慶・蘇州・杭州を開放することを約して、和を講じたり。時は實

遼東半島の還附

に明治二十八年なり。(一八九五年)
かくの如くなれば、列國もまたひとしく、その利を享けたるに、ひとり露國は、日本の遼東半島を有することを忌み、獨佛を誘ひてその還附を勧めしかば、日本は、大勢を察してこれを容れ、更に代償金三千萬兩を受けて、遼東半島を清國に還附したり。(一八九五年)

戦後の朝鮮

その後朝鮮にては、更に獨立を布告して、内治の革新を圖り、わが明治三十年に國號を大韓と改め、皇帝と稱するに至れり。然れども、内部の黨争は、依然としてやまず、國民の意氣沈滞して大勢甚だよろしからず。

第十課 二十七八年戦役ならびに

北清事變と西歐列國

列強の利害目的

西歐諸列國中、東洋に對して從來特に關係勢力を有するものは、英、露二國にて、佛、獨、米またこれに次げり。而してこれら諸國は、皆利害目的を異にし、露國は、土地の侵略を主とし、英國は、商權の擴張を旨とし、佛國は、宗教の傳播と境土の擴張とを專とし、獨國は、英國に代りて支那との通商を占めむとせしが如し。米の如きは、最も穩當にて、平和的貿易の伸張にありき。かくの如く列國の利害目的頗る同じからざれども、その東洋の覇權を握りて雄飛を望むことは互に異らず。偶日清の平和大いに破れ、北清事變起るに及びては、各國、各その利害目的を主張するに至れり。

露と旅順大連

これより先、露、獨佛の三國聯合して、馬關條約に干涉し、日本に勸告して、遼東半島を還附せしめ、その報酬として、露國